

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

津波の破壊に対抗する被災コミュニティ： 大槌町の避難所に見る地域原理と他者との関係性

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2013-04-16 キーワード (Ja): キーワード (En): East-Japan Earthquake Community Ethnography of Disaster Refugee Center NPO 作成者: 竹沢, 尚一郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003850

津波の破壊に対抗する被災コミュニティー —大槌町の避難所に見る地域原理と他者との関係性—

竹 沢 尚一郎*

Community of Disaster against the Tsunami: Properties of Local Society and Its
Relationship to the Others Observable in Refugee Centers

Shoichiro Takezawa

岩手県上閉伊郡大槌町は、東日本大震災で最大の被害を出した市町村のひとつだ。津波は役場や消防署などの主要な公共施設を破壊し、町長を含む役場の幹部職員を命を奪った。その結果、大槌町では被災の3月11日から3週間、町のあらゆる機能がストップした。そうした欠落した制度と機能の穴埋めをおこなったのは、自衛隊や緊急災害NPOの活動であり、なにより避難所で組織された住民による結合と共同活動であった。

大槌町には、海辺の諸集落と、町方、山側の諸集落という3つのタイプの地区が存在する。それぞれの地区に設置された避難所の運営形態を見ていくと、自主自律的な運営がなされた避難所、混乱して協調を達成できなかった避難所、外部組織によって被災者が組織化された避難所という具合に、地区ごとに避難所の運営形態が大きく異なることが理解された。

本論では、避難所での長期にわたる調査から理解されたこれらの相違点を記述する。そこから、今後の災害への備えや避難所の運営にとって有効な地域のあり方はいかなるものか、また、支援する側とされる側の非対称性や被災者の主体性をどうとらえるべきかを考察する。

Otsuchi-cho in Iwate Prefecture is one of the municipalities that suffered the most from the Great East-Japan Earthquake and its Tsunami. On March 11th 2011, the tsunami destroyed not only the town's administrative offices including town office, fire station, and police station, but also the lives

*国立民族学博物館先端人類科学研究部

Key Words : East-Japan Earthquake, Community, Ethnography of Disaster, Refugee Center, NPO

キーワード : 東日本大震災, コミュニティ, 災害人類学, 避難所, NPO

of those who were working in them. The lack of the administrative functions provoked by this continued for several months during which only the spontaneous and collective activities realized by the refugee people could fulfill this lack, with the assistance of the external agencies such as Japanese Army and NPOs organizations.

Otsuchi-cho can be divided into three areas: sea-side area, town-center area, and mountain-side area. Each area could be distinguished by the different management style of its refugee centers: independent and self-managed center of the sea-side area, very disrupted center of the town-center area, and center organized by the local association of the mountain-side area.

This article aims to explain the different management style of each refugee center in relation with the type of the community organization of each area. It aims also to describe which kind of relation is desirable between the refugee people and the external agencies that came to support them.

1 はじめに	4.3 臼澤鹿子踊伝承館の成功の秘訣
2 大槌町の地形と避難所の分布	4.4 大槌高校
3 海辺の集落の避難所	5 結束を実現できなかった町方の避難所
3.1 吉里吉里集落	5.1 城山の体育館
3.2 災害対策本部を立ちあげる	5.2 食料もなく、毛布もない
3.3 吉里吉里国建設大臣の話	6 地域コミュニティと避難所の運営
3.4 遺体の搜索と治安の維持	6.1 地域コミュニティが避難所のあり方に影響する
3.5 吉里吉里国運輸大臣の話	6.2 東日本大震災と阪神淡路大震災
3.6 女性たちの活躍	7 考察
3.7 吉里吉里国誕生	7.1 地域コミュニティと防災
3.8 安渡地区の避難所	7.2 ボランティアとNPOの位置づけ
4 山側の地区の避難所	8 結論
4.1 かみよ稲穂館	
4.2 臼澤鹿子踊保存会伝承館	

1 はじめに

マグニチュード9.0というわが国史上最大規模の地震とそれが引き起こした津波は、東日本の太平洋岸各地に大きな被害をもたらした。なかでも岩手県の三陸沿岸中部に位置する大槌町は、今回の震災で最大の被害を出した市町村のひとつだ。海水面から6.5メートルの高さの防潮堤を越えてまちに何度も流れ込んだ津波は¹⁾、海辺の市街地の家々を破壊し、人びとを押し流しただけでなく、がれきと化した家々やプロパンガス・ボンベを燃やして大火災を引き起こした。その結果、町役場をはじめ、警察署、消防署、病院、図書館、商店街、ショッピングセンターなど、主要施設がことごとく破壊されたのだった。

老朽化していた役場では、倒壊の危険のために役場前の広場に机を並べて対策本部会議を開こうとしていた。しかしそこに津波が襲いかかり、町長を含めた幹部11人のうち7人を押し流した。役場は2階の天井まで浸水し、なかで勤務していた職員の多くも水に巻き込まれて、146人の役場職員のうち40人もの命が失われてしまった。多大な人的被害と建物の全壊に加え、すべての機器が破壊され重要書類がすべて流出したことにより、役場の機能は完全に停止したのだった。

大槌町の被害がどれほど大きかったか、いくつか数字をあげておく。被災前の大槌町の人口約1万6,000のうち、10パーセントに近い1,307人が死者・行方不明となり、全家屋の約58パーセントにあたる3,700軒が全半壊した。家を失った人びとは38ヶ所の避難所に逃げ込み、その数は最大で6,200人に達した²⁾。大槌町の全人口の約半数が、亡くなるか家を失った計算になる。

とりわけ被害を拡大したのが、市街地で発生した火災であった。丸3日のあいだつづいたそれは、がれきを燃やし、家々を焼き尽くしただけでなく、山林にまで燃え広がったことで消火の手が入ることを妨げた。そのため、外部の救援が入ることがきわめて困難になり、大槌町の複数の集落の避難所は数日のあいだ周囲から完全に孤立した。安否を確認する手段がないことから、新聞等は被災後5日にわたって大槌町では1万人以上が消息不明と書きつづけたほどであった（写真1）。

私は震災の翌月から大槌町を中心とした三陸沿岸の市町村で、津波で流出した書類やアルバムの整理などのボランティア活動をしたり、住民が自発的に立ち上げたNPO団体やまちづくり組織を支援したりするのと並行して、被災後の人びとの行動を記録する作業に従事してきた。話を聞いた人の数は200人を超えるが、そのうちの

45人ほどについてはビデオにおさめている³⁾。

地震と津波の破壊から大槌町の人びとはどのように逃れたのか。すべてを失った状態から、彼らはどのように立ちあがって避難所を運営し、生活の再建に向けて進んできたのか。さらに、彼らはまちをどのように再建すべく取り組んでいるのか。地震直後の緊急避難行動から、復旧・復興へと向かう1年半をできるだけ彼らの視線に沿って記録すること、それがその作業の目的であり、現在それを1冊の本にまとめている。そのうち、本論では彼らの手になる避難所の運営に焦点を当てながら、大災害に対して地域コミュニティがどのように立ち向かったか、そして彼らがその過程でどのような困難を経験し、どのように協力しながらそれを乗り越えてきたか（あるいは乗り越えることができなかったか）を描き出したい。

できるだけ彼らの視点に沿ってその経験を記述することが、なぜ必要なのか。地震と津波が未曾有の規模であっただけに、三陸沿岸の人びとが経験した一連の経過は、これまでに見たことも聞いたこともないほど特殊で特異なものとなった。そうした特異性を再現するには、余分な解釈や注釈を避けながら、かれらの発言と行動をできるだけ忠実に再現していくことが必要だと考えられるのだ。しかし、その後にかれらがとった行動は、津波の経験の特殊性を越えて、誰にでも理解可能な一般性や普遍性を



写真1 大槌町の町方は完全に廃墟となっていた（2011年4月20日、写真はいずれも筆者撮影）

もつにいたった。自己と他者を助けるために自発的にとったかれらの行動は、それを経験していない私たちにも理解可能なものであり、それを再現することで、彼らに対する理解と共感が生まれてくると同時に、万一私たちが大きな災害に見舞われたときにどうすべきかの指針と教訓を見出すことが可能になるのだ。

とはいっても、私は傍観者ないし客観的な観察者として彼らに接してきたわけではない。最初の滞在時には、津波に流された書類や写真の整理のボランティアとして活動し、つぎの2回の滞在時には、被災者と共にながれきの整理をしたり、彼らが立ち上げようとしていたNPO活動を支援し、さまざまなアドバイスをしてきた。さらに、被災から半年たった2011年の9月以降は、地元住民が主体となったまちづくり活動を支援し、彼らの生活実態や希望を聞き取りながら復興まちづくりのプランを作成したり、住民と共に行政機関に行き交わしたりするなどの活動をおこなう一方で、そうした支援活動を記録・保存することにも意義があると考えてその全過程を記録してきた。その意味では、私が岩手県下の各市町村での活動を通じてめざしてきたのは、津波による破壊とそれからの生活の再建を主体的・主観的に経験してきた彼らと、それに主体的に立ち会おうとしてきた私という、2つの主観の出会いの場として「災害エスノグラフィ」⁴⁾を作成することであった。

であれば、私がどのようにして大槌町とかかわるようになったのか、その過程をまず描くことが必要だろう。東日本大地震が発生し、その直後に生じた津波によりいくつもの市町村が完全に破壊され、多くの人びとが犠牲になった映像を見たときから、私たち親子はその衝撃の大きさに打ちのめされていた。仕事に取り掛かろうとしても何にも手をつけることができず、テレビを見るときも眺めるばかりで、時間ばかりが経過していたのだった。被災後2週間を経過したのちもテレビのニュースやインターネットの情報でほとんど事態が改善されていないことを知ったとき、私たちは親子で話しあって被災地支援に行こうと決めた。そのとき、心がフッと軽くなったこと、救われたような気がしたことを、今も鮮明に記憶している。

では、どこへ行くべきか。私たちはボランティアの受け入れに積極的であり、すでにかかなりの数のボランティアが入っていた宮城県ではなく、ボランティアの活動がcaぎられている岩手県に入りたいと考えた。被災直後の岩手県下の各市町村は、たぶん混乱を避けるためであろう、外部ボランティアの受け入れを制限していた。しかし、まちのすべてが破壊されていた大槌町だけは、それを制限する余裕すらなかったのか、岩手県下では唯一ボランティアの受け入れが可能な市町村であった。それゆえ、私たちが大槌町に向かったのはある意味で自然ななりゆきであった。

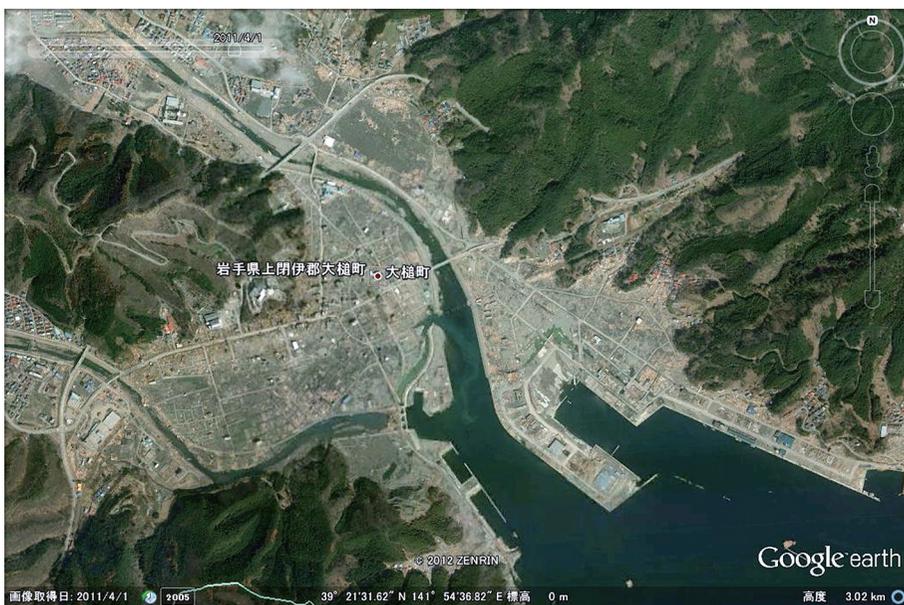
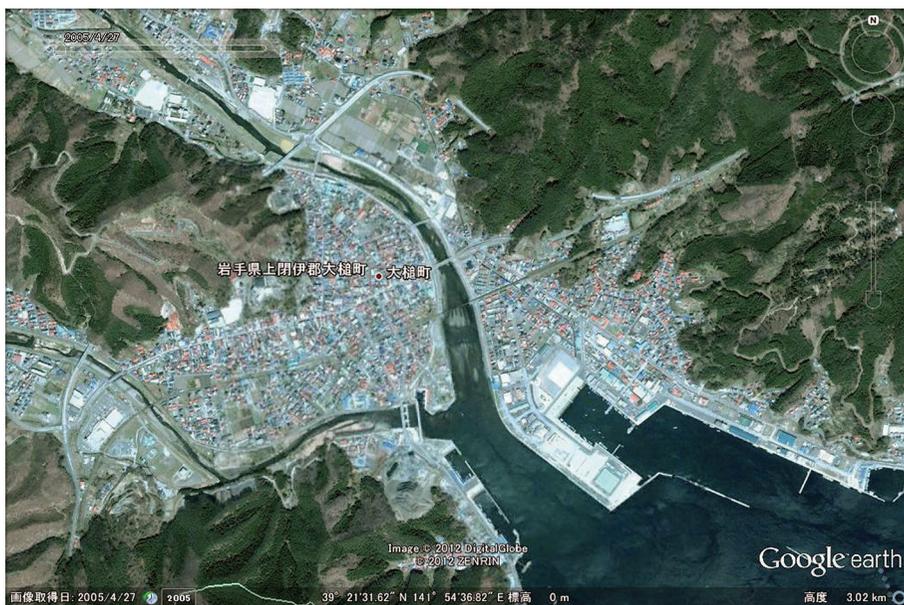
支援に行くにしても、被災地ではガソリンが容易に手に入らない。それを知っていた私たちは、供給が回復する日を待っていた。ようやく被災地でもガソリンの入手が可能になったと知った4月上旬、私たち親子3人はどこでも寝泊まりできるように車にテントと寝袋、食料を積んで、京都の自宅を出発したのだった。

高速道路の北陸道から東北道にまわり、花巻で高速をおりて、遠野、釜石、大槌へと車を走らせる。JRの釜石駅までは、道路に若干の陥没と崩壊の危険を知らせる標識があるのをのぞけば、なにひとつ変わらない日常がつづいているように見えた。しかし、そこを過ぎると、光景はとつぜん変わった。テレビのニュースを通じて予測していたのとは比較にならない光景が、その先には広がっていたのだ。信号はすべて失われ、道路の両側にはがれきや破壊された車がうず高く積み上げられ、鉄筋コンクリートの建造物をのぞいてすべて無くなっていた。(写真2)しかも、わずかに残された鉄筋の建物さえ、壁は大きく破れ一面に黒くすすけ、長時間火災にさらされていたあとが深く刻印されていた。そうした荒涼とした光景のどこにも人影はなく、無人のまちで動いているものといえば緊急車両か自衛隊の車だけであった。

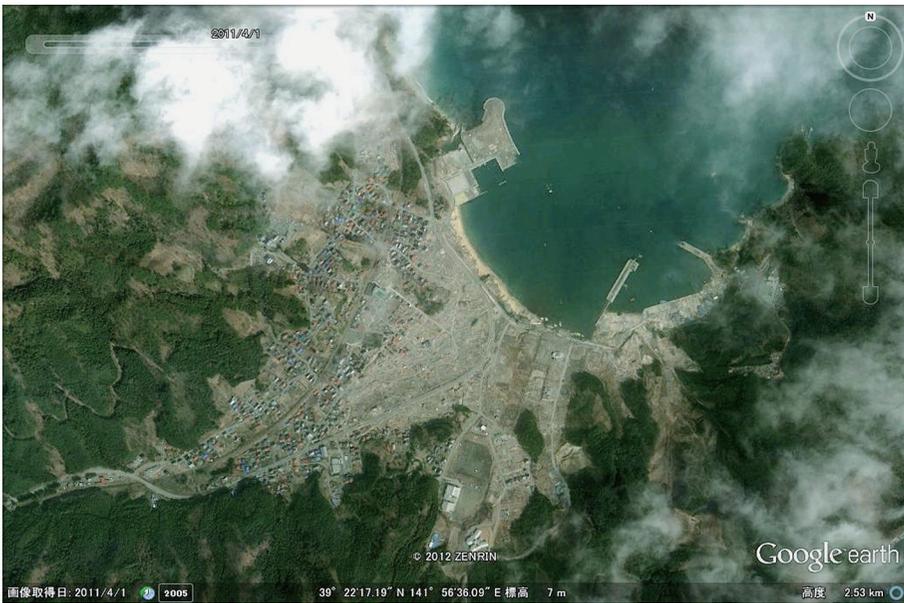
その日から被災後1年半を経過した9月11日まで、私たちは約半分の月日を岩手県下で過ごしてきた⁵⁾。2011年4月の最初の滞在時には、先に大槌町に入っていたNPO団体と共に、津波で家々から流出した書類やアルバムをがれき処理の自衛隊員が運んでくるので、その整理をしていた。書類やアルバムのなかには、津波で流されたいくつもの人生の記録である写真があったし、貯金通帳や健康保険証、卒業証書、さらには権利書といった人間の存在を証明する書類も多く含まれていたもので、やりがいのある仕事ではあったが、悲しみのつきまとう作業であった。一方、そうした作業と並行して、いくつかの避難所や役場をおとずれて避難所の実態を調べたり、まちづくりへの協力を申し出たり、復旧・復興の核になりそうな人を見出そうと試みたりした。しかしその時点では、生き延びることと、遺体を捜索することに力点がおかれた避難所や役場では、今はそれどころではないという返事が返ってきただけだった。

しかし、被災から2ヶ月半後の5月下旬にもう一度出直したときには、役場が機能していないことを嘆く大槌町の住民のあいだから、若手を中心にしたまちづくり組織を立ち上げようという声がかき起っていた。まちづくりについては他所で長く支援をしてきた経験があるので、私としても未知の分野ではない。初めてのことで戸惑いがちなメンバーの活動を支援して、いろいろなアドバイスをしたり、避難所や一般家屋をまわって集会のビラを配って歩いたり、集会の時には参加者の発言を記録して資料を作成し、それをまちづくりのメンバーに渡すなどの活動をおこなった。それと並行し

竹沢 津波の破壊に対抗する被災コミュニティ



被災前（2005年4月27日）と被災後（2011年4月1日）の大槌町中心部の衛星写真



被災前（2005年4月27日）と被災後（2011年4月1日）の吉里吉里地区の衛星写真

て、将来、地域に津波関係の博物館や資料館が建設されることがあれば、博物館に勤務する一研究者として協力することができるのではないかと考え、人びとの被災直後の行動や避難所の運営の仕方をたずね、ビデオやレコーダーに記録したのだった。

しばしば今回の被災地の復旧・復興は「ゼロからの出発だ」といわれる。たしかに大槌町では、町役場をはじめ、警察署、交番、消防署、図書館にいたるすべての行政機関が機能を停止し、すべての病院や医院が破壊され、ほぼすべての商店が消失し、被災前から行き詰っていた漁業協同組合が破たんした。これらは被災前の大槌町の経済と人びとの生活を支えていた主要な制度のほぼすべてであり、それらが完全に失われてしまったがゆえに、何が復旧・復興の主体になりうるのかが被災後1年半を経過した今も見えていない。

しかし、彼らがゼロから出発しているとは私は考えていない。彼らが避難所を運営する上で依拠したのは、被災前から存在していたコミュニティや地域団体のつながりであったし、彼らが生活を再建する上で頼りにしているのは、漁や農業、商業などの身体化された技術と知識だ。それに加えて、多くの人びとに一体感を与えてくれる祭りや郷土芸能があるし、海がもたらした全面的破壊を経験したことで海への畏怖と愛着とを再認識しつつある。大槌町の人びとは、これらの社会的文化的に蓄積された資源を活用することで、地震の直後から襲ったさまざまな危機と困難に対抗してきたのであり、すべての制度が崩壊したときにもなお人間にはどのような力が備わっているかを、被災直後の避難所での相互扶助と共同行動に焦点を当てながら描いていくことこそ本論の目的のひとつなのだ。

さらにもうひとつ、避難所に避難した地元民とその外部の人びとの関係についても論じていきたいと考えている。震災直後の数日間、いくつかの避難所では被災者たちはまったく孤立した状態のなかで、他からの助けを受けることもなく、自分たちで生活を組織し、安全を確保することを迫られていた。しかし、1週間ほどすると、自衛隊や他府県の警察や消防の支援が入り、さらには役場や社会福祉協議会の職員、被災しなかった地元の人びと、それに他所から駆けつけたNPO関係者やボランティアといった、他者との関係を構築することを迫られるようになった。あとでとりあげる吉里吉里の避難所では、最初は自分たちだけで全部をやりぬく覚悟で「ボランティアお断り」の貼り紙を出していたが、やがてNPO団体やボランティアと協力しながら、被災後の無の状態から自立をめざして立ちあがるようになっていったのだった。

避難所という存在は、その定義からして自立して存在しうるものではなく、さまざまな他者との関係性のなかに否応なく巻き込まれて存在するものだ。であれば、被災

者の自立と他者による支援とはどのような関係にあったのか。被災者と支援者とのあいだにはどのような課題が生じており、それを乗り越えるには何が必要なのか。それらの課題を考えることもまた、本論のなかで突き詰めていきたいテーマのひとつなのだ。

序論の最後に、これまでの人類学的な災害研究に対して本論文がどのように位置づけられるかを簡単に記しておこう。被災地に深く入り、そこでの被災の状況とそれからの復興に向かう人びとの活動を記したものに、清水展の『噴火のこだま——ピナトゥポ・アエタの被災と新生をめぐる文化・開発・NGO』（清水 2003）や、林勲男が編集した『自然災害と復興支援』（林編 2010）、ホフマンとオリヴァー＝スミス編の『災害の人類学——カタストロフィと文化』（ホフマンとオリヴァー＝スミス編 2006）などがある。

このうち、最後の本は『災害の人類学』を名乗ってはいるが、原発から産業廃棄物、干ばつまでをとりあげ、しかも歴史、文化、経済、生態などのテーマを広く扱ったものであり、ここでの議論とはほとんど関係しない。2004年のスマトラ島沖地震と津波に焦点を当てた林の編著は、本論に直接に関係するテーマを含んでいるが、被災社会の支援から復興、開発までの過程を広く扱ったものであり、被災地における複数の避難所の運営方法と地域社会との関係を克明に記述しようとする本論との関係性は意外と少ない。

一方、清水の『噴火のこだま』は、彼が長期にわたって研究してきたフィリピン・アエタの人びとが、ピナトゥポ火山の爆発によって居住地を追われ、避難生活から、復興、再建、新たなアイデンティティの創造へといたる全過程を記述することに主眼がおかれたものであり、被災者の語りを多く収録している点でも本論文と共通性をもつ。しかし、その本はアエタの人びとの10年にわたる活動を論述するものであり、今回の東日本大震災に遭遇した人びとが、どのように避難所で活動を展開することで生活を再建し、そこからどのように他者との関係性を切り開こうとしてきたかをほぼリアルタイムでたどろうとする本論文は、速報性や原資料の豊かさ、社会的背景の異質さなどの点で独自の価値を有していると判断している。とりわけそれは、ひとつの町の10ヶ所あまりの避難所をとりあげ、比較をしながら、それぞれの避難所の運営方法と人びとの共同行動、および地域的背景との関係性に焦点をあてたエスノグラフィを作成しようというものであり、これまでにほとんどなされたことのない研究とあってよい。

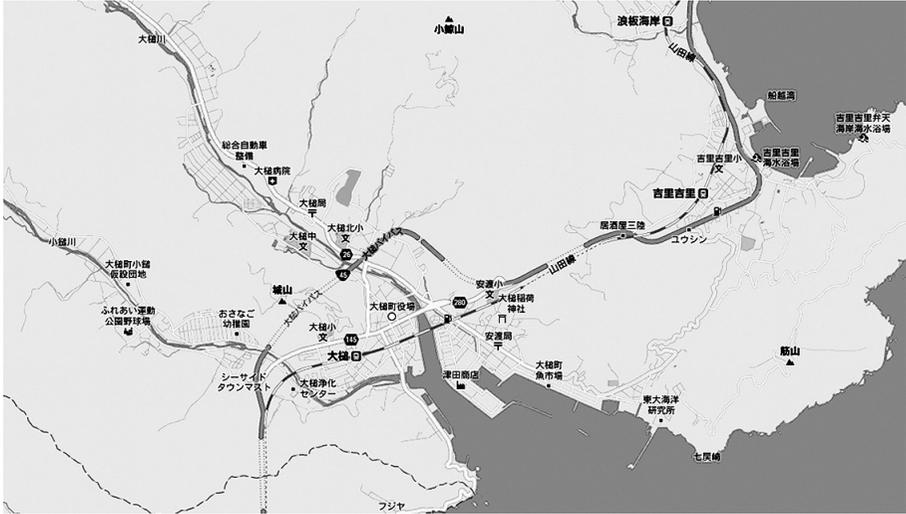


図1 大槌町全図 (図はいずれも筆者作製)

2 大槌町の地形と避難所の分布

大槌町は太平洋に面し、北の大槌川、南の小釜川という、2つの河川がつくる扇状地に築かれた町だ(図1)。北のベーリング海から流れてくる寒冷な親潮の影響を一年中受けるので、夏は涼しく、冬も比較的温和だ。南は鉄の都として知られる釜石市に接しており、本来はそこで花巻まで通じるJRの釜石線に乗り換えるが、現在は津波によって釜石駅までの線路が寸断されている。北は山田町から宮古市へとつづき、こちらはJRの山田線が盛岡市まで通じていたが、これも今は宮古駅までが止まっている。一方、西は笛吹峠を越えて『遠野物語』で知られる遠野市につながっており、過去にはこれが大槌町の魚や加工品を搬出するルートであった。車を使うとすれば、この笛吹峠を越えるか、幹線道路である国道45号線を通して釜石に出、そこから遠野、さらに花巻や北上に出るのが一般的だ。

大槌町の西側には、神楽で有名な早池峰山からつづく尾根上に大槌町の最高峰である白見山がある。大槌町の2つの河川、大槌川と小釜川はこの山を源泉としており、山から下るにつれて離れていくが、太平洋に注ぐときにはほとんどくっつくまでに接近する。その2つの河川がつくる狭い平地に、大槌町の人びとは家を建て、まちを築いて暮らしてきたのだ。

大槌町は山が海のまぢかにせまっているので、市街地の多くは海を埋め、砂州に盛

り土した埋め立て地の上にある。手もとに昭和25年に撮影された大槌町の航空写真があるが、それを見ると、海岸線から500メートルほど離れて並行するJR線より海側には住宅はほとんどない。そこには川がつくった砂州と砂浜が広がっており、当時を知る年配者たちはそこで潮干狩りをしたり海水浴をしたりしたことをなつかしく語っている。反面、こうした埋め立て地に造成された町であることが、今回の津波の被害を大きくした原因であった。海辺の漁村集落だけでなく、防潮堤を乗り越えてきた津波によって町の中心市街地もほぼ全壊状態になったのだ。

大槌川と小槌川という西の山地から流れてくる2つの川は、上流の森が生むミネラルや養分を海にもたらす恵みの川であると同時に、まちのいたるところで湧水として湧き出している。かくして、山と森と海という3つの恵みにはぐくまれた大槌町は、鮭や鱒、ホタテ、カキ、ムール貝とも呼ばれるシュウリ貝の格好の産地であり⁶⁾、とくに大槌川を遡上する鮭は「南部鼻曲がり」と呼ばれて珍重されてきた。鼻曲りとは、十分に成長し、生殖能力の向上した鮭の鼻が下に曲がっていることをあらわすことばであり、江戸初期から将軍に献上されるなど、大槌をはじめ三陸全体の海の豊かさを象徴する存在であった。

海がもたらす恵みは近年までつづいており、たとえば明治20年には大槌町の総戸数1,125戸のうち、漁業に従事するもの548戸と約半数を占めていた（大槌町漁業史編纂委員会編1983）。今日では大槌町の経済のうちで漁業の占める位置は低下しているが、代わって水産加工業が主力となっており、海辺の集落ではそれに従事する人口がかなりの割合を占めている。

大槌町の特徴は何といっても美しい海岸線であり、それに沿った集落で営まれる漁業や水産加工業だ。しかし、それだけが大槌町を構成しているわけではない。2つの河川の合流地域には、役場や図書館、消防署、警察署、JRの駅、商店街などの主要施設がそろっている商業行政地区があり、上町、本町、新町、末広町などの町内からなるそれは一括して「町方」と呼ばれている（図2）。そこからさらに内陸に行くと、小槌、白澤、金澤などの農業を中心とした集落があり、これらは過去には鉄や金の生産が盛んにおこなわれていたが、近年は人口も希薄になり、商店などもないので車がないと生活には不便だ。

かくして、大槌町には海岸から内陸に向かって3つのタイプの地区があることになる。漁業や水産加工業を主とする海辺の集落、中心市街地である町方、農業を主とする山側の集落の3つだ。これらの3つの地区は産業構造も地域コミュニティのあり方も大きく違っており、そこから今回の被災後には避難所の規模や運営の仕方が異なる



図2 大槌町中心部（町方）

こととなった。海辺の集落は人口規模でいえば1,000人から2,500人程度であり、集落には小学校が1つしかないため、住民はたがいによく知り、結束が固い。そのため、避難所では素早く住民主導で対策本部を立ちあげ、住民自身の手で炊き出しも継続しておこなった。

これに対し、町方は人口約8,000と大槌町全体の半分を占め、しかも複数の小学校や町内会に分かれているだけでなく、産業構成も複雑なため、全体としてのまとまりが少ない。そのため、今回の被災後には山側の集落にもうけられて組織化の進んだ一部の避難所をのぞけば、多くの避難所は寄せ集められた個人の集合体でしかなく、対策本部などの組織を立ち上げることもできなかった。そこでの生活は緊張を強いられる過酷なものとなっていた。一方、山側の集落は今回は被災しなかったかわりに、町方から逃げ込んだ被災者を受け入れたことで、いくつもの避難所がもうけられた。それらの避難所の多くは、一ヶ所あたりの避難者数がかぎられていたことや、地域社会の支援を受けることができたことで、比較的調和のとれたものになっていた。

そうした避難所ごとの組織や運営の違いは、訪れる者にもただちに気配として伝わるようなものであった。組織と運営に明確な秩序の形成されていた海辺の集落の避難所では、あたかも一軒の家のような和やかな雰囲気が広がっており、女性たちはてん

でに集まっておしゃべりをやめないし、子供たちも集まって何ともなかったかのよう
に外で遊んでいた。これに対し、何ヶ月経っても組織化が進まず、バラバラの状態
のままに避難者がおかれていた町方の避難所では、家族ごとに身を守るように固まっ
て暮らしているばかりで、いつ行ってもピリピリとした雰囲気が支配し、子供が外で
遊ぶ姿など見たためしかなかった。

避難所での生活は、3月11日の津波の直後にはじまり、仮設住宅が完成したり、
借り上げ住宅等への移動が進んだりした結果、避難所がすべて閉鎖された8月11日
まで5ヶ月間つづいた⁷⁾。それまでのあいだ、避難所では見知らぬ何百人という人と
隣接し、プライバシーを守ることのできない環境のなかで、共に食事をし、共に眠る
ことを余儀なくされる。そうした生活環境の困難に加えて、避難者どうしがたがいに
不信の目を向けあうような心理的負担が生じ、しかもそれが5ヶ月もつづいたとすれ
ば、そのときの苦痛はどれほど大きなものであったことか。

1995年の阪神淡路大震災のときも、2004年の中越地震のときも、避難所から仮設
住宅への移動が完了するには半年前後の時間がかかっている。とすれば、地震や津波
のような大規模災害が生じたときには、半年のあいだ避難所暮らしがつづくことを前
提に考えていくことが必要になる。ところが、避難所の運営とそこでの生活の実態に
ついては、一方的な記事や出版がなされているだけで、正確な記述や分析は奇妙なほ
ど欠如しているのが現状だ。運営のうまくいった避難所がことさら称揚されるかと思
えば⁸⁾、そこでの生活の困難を強調するセンセーショナルな情報ばかりが提供されて
きたのだ。

いわく、避難所ではプライバシーがなく、避難者は見知らぬ人のあいだで緊張した
生活を強いられるので、それを避けて外の車やテントで暮らす人も多い。いわく、避
難所では菓子パンや弁当が配給されることが多いので、野菜が不足して、栄養に偏り
と欠乏が生じがちだ。いわく、避難所では隣人の目を気にしてトイレに行く回数が減
る傾向があり、そのために水を飲む量が減るなどして、体調を壊すケースが多い。い
わく、避難所には冷房も風呂も物干し場もなく、劣悪な生活環境のなかで辛抱ばかり
を強いられる。いわく、避難所ではとくに高齢者や障害者の行動が制限されるため
に、要介護申請が増加している。いわく、避難所では女性用の更衣室や授乳場もない
ばかりか、ときに女性に対する性的暴力さえ生じている⁹⁾。

避難所での生活の困難を強調するこれらの記事が何をめざして書かれており、どの
ような効果を生んだのかは不明だ。しかし、ここで重要なことは、言い放し書き放し
に終わるのではなく、運営がうまくいった避難所ではどのような条件が備わっていた



写真2 被災1ヶ月後の安渡地区（2011年4月13日撮影）



写真3 大槌町のいたるところで陥没して水があふれ道路は使用不可能であった（2011年4月20日撮影）



写真4 津波で全壊した大槌消防署

のか、またうまくいかなかった避難所の場合にはどこに問題があり、それを改善するにはどうすればよいのかを、事実に沿って明らかにしておくことだろう。災害の多い日本に生きる私たちは、どこに住んでいても、いつなるとき避難所暮らしを強制されるかわからない。どれほど安全な場所に住んでいると思っても、道路が寸断された状態で洪水などの危険がせまったり、水道や電気が長期にわたって止まったりしたなら、誰もが避難所に入ることを余儀なくされるのだから。その意味では、避難所の運営を円滑に進めることができたり、外部の支援組織や行政との連携をうまく築くことのできた地域社会や組織の例に学んでおくことは、災害に対する備えの一環として重要なことであるはずだ。

以上が、本論のテーマでありめざすところである。しかしそれに入る前に、津波の恐怖が去った後に人びとがどのような危険や困難に直面していたかを、彼らの視線に沿って見ておくことにしよう。津波で家を流され、家財や衣服を流され、しばしば近親者や隣人を失った人びとは、身一つで避難所に逃げ込んだのだが、その彼らにまちはどのような姿に映っており、どのような課題が彼らに迫っていたのか。それを最初に見ておくことで、彼らが生活と地域コミュニティの再建のためにどのように悪戦苦

闘していたかを記述する以下の章の理解がより深まると思われるのだ。

海沿いの集落や町方では、半数以上の家々が津波によって破壊されていたので、まちは家々の残骸で埋め尽くされ、いつなごき火災が起きないともかぎらない状態であった。しかも、破壊された家々やがれきのあいだには、取り残されたり身動きできなくなったりして助けを求めている人が大勢とり残されていた。余震がつづき、津波が再来しないともかぎらない状態のなかで、彼らを誰がどのようにして救出したらよいのか。そして、彼らの救出に成功したとしても、車も道路もまったく機能しないなかで、傷ついた怪我人や避難所に逃げ込んだ病人を病院まで送り届けるにはどうしたらよいのか（写真3）。さらに、持病のある人びとが必要とする薬品を入手するにはどうしたらよいのか。

困難はそれだけではなかった。津波が生じたのは、雪の降りつづく3月初旬の寒い日であった。三陸沿岸では季節風の関係で2月から3月にかけてもっとも雪が降り、気温が下がる。夜になるとすべての電気が停まっていたので、どこにも明かりのない真っ暗闇が広がっていた。見知らぬ人の多い避難所のなかで、幼児や病人などの弱者もパニックにおちいることなく安心して過ごせるよう、天井の高い避難所をあたため、明かりを点けたかったが、そのためにはどうすればよいのか。水道が止まってトイレが使えなくなった状態で、何百人という避難者の排せつ物を処理するには何が必要なのか。それに、何より緊急かつ最大の課題は食料と飲料水の確保であった。家々が破壊され、食料が流され、水道とガスが完全に停止した状況のなかで、避難所に逃げ込んだ何百人という人びとの食料と飲料水を確保するにはどうしたらよいのか。そして、それをいつまでつづけなくてはならないのか。

大槌町の役場は津波によって流され、警察署も消防署も破壊されていたので（写真4）、町の機能は完全に停止していた。それだけでなく、各地の避難所では行政機関の人間がどこにいて、何をしているのさえわからない状態であった。すべての書類と命令系統を流出した役場が機能を開始したのはようやく3週間後であり、それまでは行政機関の職員も各地の避難所で生活する避難民にすぎなかった。それまでのあいだ、避難所に逃げ込んでいた人びとは、以上のような危険と困難にじかに向き合っていたのであり、彼らが避難所につくりあげた組織だけが、それらに立ち向かい、それらを乗り越えるための唯一の武器であったのだ。

避難者のあいだに連帯と相互理解ができあがり、明確な役割分担をもってこれらの困難に立ち向かっていった避難所と、バラバラな避難者のあいだで相互理解が進まず、たがいに疑心暗鬼におちいってしまって、ただ救援を待つだけの受け身の状態に

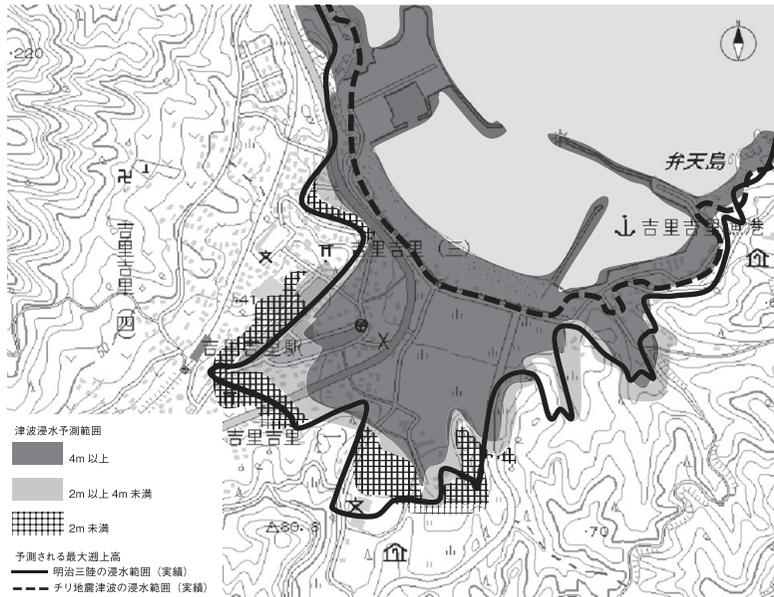


図3 吉里吉里集落の浸水予測図(実際の浸水はほぼこの予測通りであった)

おかれていた避難所。それらのケースを具体的に、かつ住民自身の語りをとり入れながら見ていこう。

3 海辺の集落の避難所

3.1 吉里吉里集落

被災直後に住民が団結して困難に立ち向かったのは、海辺の集落に多い傾向であったが、なかでも吉里吉里集落の団結力と行動力は群を抜いていた。

吉里吉里は人口2500の比較的大きな集落であり、1丁目から4丁目までの4つの町内会に分かれている(4丁目は人口が多いので2人の町内会長がいる)。今回の津波で大きな被害を出したのは、低地にある1丁目から3丁目までの町内会であり、高台にある4丁目はほとんど被害を出さなかった(図3)¹⁰⁾。町内会は4つに分かれているとはいえ、明治22年の市町村合併までは吉里吉里村という独立した行政区であったこともあり、集落全体の独立性と団結心は高い。とりわけ集落の寺社が吉祥寺と天照御祖神社の一寺一社であるため、住民のあいだの交流がさまざまな機会を通じ

て実現されている。毎年、町内会対抗の運動会がおこなわれるときには子供から大人までが参加して競うほか、旧盆のつぎの土日曜日に開催される天照御祖神社の祭りには、神輿に加え、虎舞や鹿子踊、神楽などの郷土芸能と、住民すべてが参加する手踊りが奉納されるなど、地域のむすびつきの強いまちだ。

しかも、吉里吉里には小学校が1校、中学校が1校しかないので、住民のほぼすべてが同級生、同窓生の関係にある。そのため、誰がどこに住んでいるかをみなが知っており、今回の被災後も、誰がどこに避難し、誰が逃げそびれたのがすぐにわかった。そこから、津波の危険が去ったと判断された午後4時過ぎから、地域の男たちは総出で生存者の搜索と救出を開始したのだった。

集落の約半数の家が破壊されていたので、どこもかしこもがれきがうず高く積みあがっていたが、彼らは半壊した家々やがれきの塊をひとつひとつたずねて生存者を搜索した結果、10人あまりを救出することができた。そのうちの数名は内臓破裂や骨折などの重傷を負っていたが、携帯電話や防災無線がつかならず、外部との道路が遮断されている状態ではどうすることもできない。さいわい避難所には看護師が数名避難していたので、小学校の一室を臨時の救護室に決めて、そこで応急措置をほどこして休ませたのだった。

そのなかでも特筆されるべきは、集落の高台にある北田地区の中学生5人が、津波直後から学校が再開された4月20日まで、地域の大人と行動を共にしたことであった。5人のなかでもリーダー格であった野球部キャプテンの佐野智則君は、活動のきっかけについてこう語っている。「津波があって、すぐに下に下がって行って。まず、津波がきたところに、人を助けたいから下がって行ったんです。大人たちの手伝いをしてました。がれきのなかに人がいたら、それをおんぶして避難所に運ぶっていう。そのときは2人いたんですよ。2人だったんで、それを助けました」。津波のすぐ後といえば、まだ津波が再来する危険があったときだ。怖くはなかったのかとたずねると、「いえ、そうでもなかったですね。人のために役立ちたいんでね、やっぱり。みんな無我夢中でやっていました。もう、無我夢中でした。自分たちのまちなんで、自分たちがやんなきゃ駄目だって思ってやりました」(2011年6月12日)。

いつ津波が再来しないともかぎらない危険な状況のなかで、自分の子供を他の大人にまかせて救助活動に向かわせる親が、この吉里吉里以外の日本のどこにいるだろう。5人の中学生の親たちは、救助活動に向かう大人たちをよく知っていたがゆえに安心して自分の子供をゆだねていたのであり、中学生の方でも祭りやクラブ活動を通じて平日頃から地域の大人と接触していたので、親戚でもない大人たちを全面的に信

頼っていたのだった。

学校が再開された4月20日に、彼ら5人は大人たちの前で解団式をおこなって活動を停止したが、それまでの40日のあいだ、がれきの撤去や飲料水の運搬、ストーブの燃料の確保などに地域の大人たちと行動を共にしていた。その活動を振り返って、5人のひとり大森裕介君はつぎのような感想を述べている。「あの、大人の人が俺たちを受け入れてくれたっていうこと。中学生は子供だからやれないっていうんじゃないで、しっかりちゃんと俺たちを使って頼んでくれたんで、信頼っていうか、自信みたいなのもつようになりました」。信頼こそが子供たちを成長させる最大の秘訣であることを、大人も子供も理解していたのだ。

もちろん津波の直後に活動したのは中学生だけではないし、活動の内容も救助活動だけではなかった。吉里吉里全体では5ヶ所の避難所がもうけられていたが、そのうちの3つは介護施設や地区の集会場であり、避難者の数も少なかったし、地震後1ヶ月以内に閉鎖されていた。一方、吉里吉里小学校と吉祥寺の2ヶ所の避難所には大勢の人びとが逃げ込んでおり、その数は最大で600人近くに達していた。これだけの数の人びとの食事と飲料水をどのようにして確保するか。それが、被災した夜に最初に課せられた課題であった。さいわい寺と神社には米と味噌がかなり蓄えられていたので、最初の夜は浸水しなかった家々の女性たちにも手伝ってもらって、おにぎりをつくった。とはいえ、600人もの避難者に対し、煮炊きできる鍋釜の数はかぎられていた。ひとりあたり1個、ピンポン玉ぐらいの大きさのおにぎりが行きわたっただけだった。

3.2 災害対策本部を立ちあげる

地震が生じたのが午後2時46分で、津波がきたのが3時20分過ぎ。3月の震災だったので、5時を過ぎると日が落ちてしまい、停電で真っ暗な闇の広がる避難所の外での活動はできなくなった。約400人が避難していた小学校では、炊き出しの準備がはじまるのと並行して、たき火を囲んで男たちが集まって明日以降どうするかの話し合いがはじまった。「吉里吉里地区災害復旧対策本部」という名の組織を立ち上げること、本部長には消防団長の経験者で地区の漁民のリーダーである東屋寛一さんを選出すること、彼を補佐する8名の副本部長に、5人の町内会会長と、消防団長や町内会長の経験者をあてることを決定した。

「災害復旧対策本部」という名称は、ふつうは役場などが設置する、自治体全体の災害復旧を指揮する組織に与えられるものだ。しかし、そうしたいくぶん仰々しい名



写真5 吉里吉里古学校避難所の対策本部（2011年6月15日撮影）

称を自分たちの組織に採用したことに、吉里吉里の人びとの決意があらわれていた。大植町の役場などは当てにしないで、自分たちのことは自分たちの力で解決するという決意だった。「ここはここで、本部でやるって感じでやってたから。そうでねがったら（無かったら）、まんず町の方待ってたら、なんもできねがったろうしね」。そのときのことを振り返って、何人かの男は、「緊急災害時の臨時政府の樹立宣言でしたな」と回想している（写真5）。

翌日の日の出とともに、戸外の活動は再開された。最初に何に手をつけるべきか。津波に襲われて負傷した数名の重症者や、緊急に措置が必要な慢性患者がいたので、彼らを搬出できる体制を築くことが先決であった。しかし、一晩経っても救援が入ってきていないということは、集落に入る道路が完全に寸断されていることを意味していた。携帯電話も防災無線も通じなかったので外部の状況はわからなかったが、自衛隊やマスコミのヘリコプターがかなりの頻度で飛び回っていることには気づいていた。であれば、ヘリコプターが降りられるようにヘリポートをつくれれば、病人やけが人を搬出することが可能になるはずだ。

問題は、そのヘリポートをどこにつくれればよいかということだった。避難所である小学校の校庭をヘリポートに活用できれば一番便利だが、そこは避難してきた車や家

財道具でふさがれていたの、スペースを確保することができなかった。それでは、中学校やその横の農村創造センターの広場はどうか。小学校は吉里吉里をぐるりと囲む丘の西側にあり、反対側の高台にある中学校の校庭やその横の農村創造センターの広場であれば、がれきもあまり流れ着いておらず、ヘリポートに活用することができそうだった。

とはいっても、小学校から中学校までは1キロメートル近くの距離がある。しかもその間の道路は破壊された家々のがれきで埋め尽くされていた。それだけの量のがれきを撤去するには、何十人もの男の力と機械の手助けが必要だった。しかし、運搬用の車やパワーショベルなどの重機はすべて津波で流されてしまっていたので、どうすればよいかわからなかった。そのとき、建設業をいとなむ芳賀藤一さんはあることを思い出した。彼は作業用の車や重機を5台所有していたが、自宅横に止めておいたものはすべて津波で破壊されていた。しかし、山際の作業場においておいた重機なら無事かもしれない。山伝いにそこまで行ってみると、たしかに1台は無事で動くことが確認できた。その重機をとってきてがれきを動かし、重機でも動かせないような大きながれきは何十人もの男がロープで引いて、道を開いていったのだった。

そのときのことを、対策本部でがれき撤去の先頭に立っていたので、吉里吉里国の建設大臣と呼ばれていた芳賀藤一さんはつぎのように語っている。

3.3 吉里吉里国建設大臣の話

で、つぎの朝だかなあ、道路つけねばなんねえって感じになったわけだ。そう、小学校でね。で、こういうわけだから、「みんなで道路つけかあ」ってことになって。ヘリポートがあるわけだべ、農村広場にさ。ヘリが降りるとこあんのさ。うんうん、昔から、緊急車両だの救急車とかが盛岡さ行くときは、そこから乗せてたのさ。で、こっから（小学校から）農村広場まで避難の道路をつけたんだね。ヘリで物資を持ってくるにしても、何にしても、降りるところがなければ駄目だっつって（駄目だっつって）。なんとか車を通さねばならねえし。で、こっから小学校までつけただなあ。最初は、はあ、小学校からヘリポートの農村広場まで。

うんうん、道なんてもんでねがった（無かった）、ねがった。で、つぎの朝かな。車で、ようやく軽が通れる道路あったから、車で山かかって（山際を通過して）作業場まで行ったのさ。なんでかって、作業場の方に機械あつかなあと思ってさ。だってはあ、機械全部ひっくり返っていたのさ。あの、バックホー、ユンボがね。そっで、1台だけ山さおいてあったのさ。土を取ってたから。だから、1台だけバックホーが

残ったわけさ。

それで、はあ、その朝にこっちさ渡ってきたわけさ。山さかかって。で、「じゃあ小学校に（道）つけっぺ」ってことで、小学校からこう道路つけてきた。で、幼稚園の方にも1台あったからね。藤原さんのがあったからね。それはまあ古いやつだども、とりあえず物を除けるぐれえ、車通れるぐれえできればいいかって。

んで、それと2台でやって道をつけて。それから、「今度はなんが肝心だ」ってなって、「国道を最初につけねばなんねえ」って。ほんで、みんなで出がって国道を。出がったって言ったって、重機がほら2台しかねえから。だから、みんなの手でがれきを引っ張ったりしてさ、ロープで。あとは機械で引っ張ったり。とにかく、車1台通る分だけ最初にやったわけさ。

だいたい1日ぐれえかかったかな、この辺な。うん、国道とあっちは1日ずつぐれえでねえかな。国道は1日。で、あっちの広場から、ヘリポートから小学校まではだいたい1日。ロープで引っ張ったりね。ともかく早く除けねばならねかったから、みんなでね。けっこう人数がいたね。何十人ってきて、（ロープを）持って走って、そのままあっちさ行って。んだ、けっこうな人数いたんでねかあ。みんな、ほとんどの人は出張ってたから。男の人たちははあ、ずっと出て仕事してたからな。

とにかく毎日、朝ごはん食べれば、車さ持ってって、おなか空くまでしてたもんね。地震がけっこうあってたからさ。低いところに重機おいて、また流されたらって頭にあっから、小学校の方まで持って行ったのさ（2011年6月9日）。

津波の翌日の夕方までには、吉里吉里の男たちの働きにより、農村創造センター横の広場のがれきの撤去と、そこから小学校までの道の啓開は終わっていた。そこで、センター横広場に石灰のライン引きで大きくHと書くことで、ヘリポートは完成したのだった。対策本部の広報を担当して官房長官と呼ばれていた芳賀廣樹さんは、ある自衛隊員とつぎのような会話をしたことを記憶している。「ヘリポートがなかったんですよ、ほかには。で、空から見たら、ここしか使えなかったって。で、それから無線で知らせたらしくて、ヘリコプターがどどんきてました」（2011年6月18日）。吉里吉里の住民がつくったこのヘリポートは、しばらくのあいだ大槌町となりの山田町で唯一使用可能なヘリポートであった¹¹⁾。そこに降りたヘリコプターによって吉里吉里の患者や重病人が搬出されただけでなく、山田町の重病人が搬出されるための中継基地にもなったし、2つの町に薬などの緊急物資を搬入するのにも活用されたのだった。

3.4 遺体の捜索と治安の維持

ヘリポートの設置と国道の啓開はできたが、それで吉里吉里の困難が解消されたわけではなかった。緊急事態を脱することができただけで、長い避難生活の日常がその日からはじまったのだった。

課題はいくつも残っていた。集落内の往来が可能になるように、がれきを取り除いて道をつけること。重機を動かしたり避難所で暖をとったりするために、灯油やガソリンを確保すること。がれきを取り除いて、その下から津波で亡くなった方々の遺体を回収すること。避難所や親戚宅に逃げ込んだ600人もの避難者のために、食料と飲料水を確保すること。夜になると盗賊団が出て金庫やめぼしい財産を盗んでいたの、夜警団や見回りを組織すること。そうした生命と安全にかかわる重大事だけでなく、風呂や着替えを用意することも、避難所生活が長引くにつれ、それに劣らず重要なことになっていった。なんであれ、吉里吉里のことは全部自分たちでやるしかない。彼らは生き延びるためのすべてを、自分たちでなしとげようとしたのだった。

国道の啓開を終えた男たちは、集落内部の道路の確保にとりかかった。じつはこれが難題だった。国道の場合には周囲に十分なスペースがあるので、道路の上にあるがれきを両脇に寄せるだけですんだ。ところが、集落内部の道路の場合には、両側に破壊された家々が立ち並んでおり、その下には持ち主にとって貴重な金庫や写真などの品々がある可能性があるの、そこにがれきを寄せるわけにはいかなかった。しかも、破壊された家々の下には行方不明の方々がいる可能性があった。そのため、重機でいちどのがれきを撤去することはできず、積み重なった柱や板を1枚1枚薄皮をはいでいくように慎重に進めていかななくてはならなかった。

行方不明者の遺体が見つかる、それを軽トラックにのせて遺体安置所まで運んでいくのは消防団の仕事だった。吉里吉里の消防団員は全部で30名、53歳の外館竹男さんを団長に、20代、30代、40代の若手を中心に結成されている。団員のなかには家が流された人も、流されなかった人もいたが、津波がおさまった当日から全員が吉里吉里の集落のために働いた。彼らの消防団としての活動は、集落のがれきが大部分撤去され、行方不明者の捜索が一応完了した4月20日までつづけられた。集落の若手である彼らは、がれき撤去の先頭に立っただけでなく、遺体が見つかる、それを收容所まで運ぶ仕事も引き受けていたのだ。

1週間すると自衛隊が吉里吉里にも入り、大量の支援物資を運び入れてくれた。自衛隊の重機はまだ動いていなかったが、彼らもまたがれきを取り除きながら、遺体の

搜索活動を開始してくれた。にもかかわらず、搜索活動の主役は消防団でありつづけた。その間の事情を、消防団長の外館さんはつぎのようにいっている。

「毎日毎日、がれきの撤去、遺体の搜索、患者の輸送。毎日、そんなことばかりしてましたね。あの、自衛隊の人たちと合流して、こっからこっちは消防団で探す、こっちは自衛隊さんで探す、っていうふうな感じで。自衛隊さんたちは、1週間では、同じ部隊の人がいないんですよ。1日か2日ぐらいで交代していくんです。「今度はあっちの（部隊が）まわってきます、こっちにまわってきます」って言って。だから、毎回メンバーが代わってきてね、そのために段取り打ち合わせしたりなんかして。海上自衛隊の人がくれば、海上自衛隊の人を海に連れて行って、付き添いをして。遺体発見するかもしれないから付き添っていて。見つかったら、遺体の搬送するように軽トラをもって行って。自分の今もっている軽トラ、遺体搬送用の軽トラにしたから。でも、思ったより遺体の数は上がらなかったですものね。津波にやっぱり流されて行った人が結構いましたから」（2011年6月25日）。

遺体の回収は大変な作業だった。とくに消防団の団員はみな若く、そんな経験などしたことのない人たちだった。津波でやられた遺体は損傷がはげしく、顔が崩れていたり、手や足がもげていることもしばしばだったし、とくに海からあがってきた遺体は、海の生物にやられてひどく損傷していた。にもかかわらず、彼らはそれを最後までやり遂げた。「消防団も大変だって言ってたな。だって、みんな若い人だもんな、消防団は。消防団は一番稼いだ（よく働いた）んでねえかな。俺たちは1日終わって、寝ただけなものな。疲れてっから」。芳賀藤一さんの評価だ。

収容された遺体は、吉里吉里中学校の体育館に収容された。それは警察の管理だったが、地元縁のない彼らは遺体の確認ができなかった。それで遺体が発見されるたびに、対策本部の副部長のひとりであり、警察や自衛隊との折衝を任されていたので吉里吉里国防衛大臣と呼ばれていた芳賀衛さんが呼び出された。消防団長やPTA会長をつとめた経験のある彼は、集落の住民全員の顔だけでなく、病歴などもよく知っていたので、遺体の確認作業を一手に引き受けたのだった¹²⁾。

「遺体はね、損傷がひどくて、顔見ただけではわからないことが多かったんですよ。あの人は乳がんの手術をしたことがあったとか、あの人は胸を患って手術をしたとか、そんなことを考えながら確認していきました。1ヶ月半経って見つかった人なんか、顔はもう崩れていてね。でも、小さな小刀を紐に結わえて身につけていたっていうから、ああそれは（行方がわからなくなっている）漁師の田中さんだって。漁師は網をつくろったりするのに、よく小刀を身につけてますからね」（2011年8月3日）。



写真6 吉里吉里消防団の会合（2011年6月25日撮影）

吉里吉里集落で亡くなった88名のうち、行方不明者十数名をのぞく約70名は、こうしてDNA鑑定を待つことなく全員確認されたのだった。

もっとも、遺体の確認をしたのは芳賀衛さんだけではなくた。車も捻じ曲げるような津波のものすごい破壊力によって、生前の顔を想像できないほど損傷した遺体が多かったため、衛さんは同期の芳賀藤一さんや彼のつぎに消防団長になった川原孝平さんにも頼みながら、遺体の確認作業を継続した。そのときのことを藤一さんはつぎのように思い返している。「まあ、ひどかったね。耳だって、鼻だって、もげて、ねえんだもん。顔見たってわかんねえのよ、誰っか」。それらの人びとのことを思い出したり、夢に見たりすることはないのかとたずねると、「ねえ、ねえ。見たことなんかねえ」と藤一さんと孝平さんは声をそろえた。それは若い消防団員たちもおなじであり、被災の3ヶ月後に彼らと雑談をしたときに、その屈託のなさや陽気さに驚かされたほどだった。地域の人びとのために活動しているという気持ちと地域の人びとから返される感謝との相互関係が、つまり個々人の感情や経験が集合性の中に吸収されていく構造が存在することが、彼らの精神的安定に大きく寄与していたのであろう¹³⁾（写真6）。

消防団の仕事はそれだけではなくた。本当に腹立たしいことだが、津波の引いた

その夜から、しかも停電で電気のない真っ暗な闇のなかで、どこからきたのかわからない人間が盗みをはじめていた。食堂と仕出し屋を経営していた芳賀廣安さんは、津波に破壊された自宅に金庫が残っているのを発見していた。大きな金庫なので避難所にもっていくわけにはいかない。板や柱の下に隠しておいたが、翌朝見るとすでにその姿はなかった。また、吉里吉里の郵便局にはとても動かさないほど大きな金庫があったが、それもバールのようなものでこじ開けようとした跡がついていた。さらに、津波で亡くなった遺体の薬指が切り落とされていたということも、よく聞かされた話だ。そうして結婚指輪を盗っていったというのだ。

盗難があいついだのは、とりわけ津波の日の夜と、それにつづく2日間の夜だった。これではいけないということで、消防団が消防車にのって集落をまわって自警をすることになった。しかし、車のライトが照らす箇所以外は、どこも真っ暗な闇だった。しかも、盗賊たちはどんな武器を用意しているかもわからなかった。警察も機能していない無法地帯で、若い彼らは怯えながらも集落のために車を動かしていたのだった。

「夜中になったら、吉里吉里の町内をこう、不審者とか何とかね、家に入られたっていうことがあって。それで、夜中にカンカン回しながらやったりしましたね。ガソリンスタンドの警備とか、夜の8時から朝の5時までスタンドに泊まって、赤ランプをまわしてずっとやりました。10日に1回はここに（消防団詰所に）集まって、エンジン点検したりして、あとは町内1周ぐるっと回って。1ヶ月、2ヶ月ぐらいいかな、ずっとこのままやりましたね。本当に休む間もないし、自分の時間もとれないしね」。消防団長の外館さんは思い返している。ガソリンが盗まれないよう、スタンドの見張りをするのも彼らの任務であった。

3.5 吉里吉里国運輸大臣の話

遺体収容の軽トラックを動かすにしても、がれき撤去のための重機を動かすにしても、さらには避難所の暖を取るにしても、まず必要なのは石油やガソリンを確保することであった。自衛隊の救助活動が本格化し、多くの支援物資が入るようになる以前、どの行政機関もどの避難所も、もっとも困ったのはこの点であった。この点を、独立心に富む吉里吉里ではどのように解決していたのか。

驚くべきことにこの集落では、さまざまな技能をもった人びとが協力して、この課題を乗り越えていた。彼らはガソリンスタンドの蓋をこじ開け、手押しポンプを自分たちでつくることによって、地下のタンクからガソリンや灯油を取り出していた。油の補給の責任者で、吉里吉里国運輸大臣と呼ばれていた芳賀正彦さんに、その間の事

情をたずねよう。対策本部の副本部長のひとりであった彼は、油の確保だけでなく、ヘリポートの設営と運営もよく把握していた。

ガソリンですか。それはですね、私は60歳で現役リタイアして、今63なんですけど、この町に2つあるガソリンスタンドのうちのひとつでアルバイトしてたんです。

津波のつぎの日、災害復旧対策本部会議が最初におこなわれた日に、本部長さんからですね、「芳賀さん、お前さんスタンドで働いているから、あの地面から上の部分全部なくなったけど、地下にあるタンクはなんとか汲みあげることができるんでねえべか。なんとか協力してくれねえか」って言われたんですよ。「もし地下タンクから、ガソリンや灯油、軽油、汲みあげることができれば、その燃料をこの吉里吉里地区の復旧のために使うことができねえべか」って、お願いされたんです。津波の日に。そのスタンドの経営者がですね、責任者は山田町に住んでいる人で、全然連絡も取れない、携帯もつながらない。ただ、こういう大災害でしたので、「私はもうわかりました」といって引き受けました。所有者の許可もなしで。ある役員の人からは、大丈夫かって心配されましたけど。

許可を得ないで。ほんで、なんかあった時には私が全部責任をとるつもりでいました。そして、4日後か5日後かな。やっと責任者にお会いして、実はこうこうこうで、「勝手なまねして申し訳なかったけれど、独断で地下タンクから汲みあげている」っていったら、さいわい「良くやった」って褒められました。

まず、コンクリートの5ヶ所に、地下タンクの真上に蓋がついているんですよ。キャップみたいに。それをなんとかこじ開けて。さらに、その下にキャップがついているんですよ。こんな鉄製のねじ式のキャップなんですけれども。地面から30センチぐらい下にあるのかな、そのキャップ。とても手なんかでは緩まないんですよ。だから、地元のそういう持ち場のやれるやつ集めてきて、なんとか手工具つくりました。キャップを回す工具をつくって、キャップを開けました。そして、がれきの中から使えそうな手動ポンプ、そういう部品になるようなやつを集めて組み立てて、地下タンクからガソリンやら軽油とかを汲みあげたんです。全部がれきの中から集めてきたパーツを何とかかんとか組み立てて、地下タンクから汲み上げるようにしたんですよ。

津波のつぎのつぎの日に、もう汲みあげました、はい。真っ先に灯油のキャップを開いて、灯油を汲みあげて、避難所に運んで、暖房、ボイラーの燃料にしました。で、その話を聞いて、大槌の役場の車とか、あとは釜石の県立病院の救急車とか、あとパ

トカーなんかもですね、ぜひ油入れてくれてきたんですね。釜石、大槌、山田で、津波の後に石油燃料を確保したのは、この吉里吉里の私がアルバイトした店だけなんです。あまりマスコミとかには知られていないですけども。ずっと続いたのかな。しばらく続いたですよ。金額にして2,300万ぐらいの量のガソリンと軽油になりました。全部無料で。

ほとんど空っぽになってしまいました。その話を聞いて、被災していない方々のマイカーなんかもくるようになったから、そういう方々は駄目だよってということで、吉里吉里災害対策本部で給油許可書というのをつくって、それを発行して。それを持ってきたのに給油してやるようにって。大変だったんですよ、いろいろと。

12、3名の若手の、たとえば溶接が得意な男、機械関係が得意な男、電気工事店で長いこと働いていた男。それぞれが、ひとりひとり持ち場の技術を發揮して、そういうのができるようになったんですよ。行列つくったんです、津波のつぎのつぎの日から汲みあげたんで。最初は吉里吉里の避難所運営のための車両がきたんですけども、もう3日、4日、5日になったら、ずらーっと行列でしたね。

寒い日だったですから、雪が吹雪みたいに降っているときでしたね。みんな頑張ったですよ。すると、被害を受けていないお家の方々が、これ着ろ、ジャンパーがあるから着ろとか、カッパがあるから着ろとか。そういうのを借りながら、道路、吉里吉里小学校から国道までの道路を確保しながら、同時に吉里吉里中学校の下にある、野球とかできるグラウンドがあるんですが、そこのがれきも撤去しながら、ヘリポートも同時につくりました。救急患者とか、支援物資とか、そういうのがきてくれるように、2本立てで作業に入りました。津波のつぎの日から作業ははじめました。

ヘリポートは、津波から2、3日後にはもうできあがって。自衛隊のヘリとか、盛岡の県立病院とか救急センターからヘリコプターがきて、重傷患者とか、津波で重傷を受けた方を運んで行きました。脊髄損傷したり、いっぱいいましたよ。

道路確保っていうのは、がれき撤去して道路通れるようにするだけじゃなくて、がれきをどけながら、行方不明者捜索も兼ねているんですね。重機運転する人。で、重機のまわりに10人ぐらいいて、重機でがれきを静かに持ち上げて、その下のぞいて、犠牲者がいないか。そういうのを捜査しながら、作業は進められました。

えーと道路確保、吉里吉里の町の中に通っていた道路が全部車で走れるようになったのはですね、小学校、中学校の学校がはじまるのが4月の20日ごろですから、そのころまではつづいてましたね。自衛隊は、津波直後、1週間ぐらいでこられたのかな。いや、4、5日できてくれたのかな。まず自衛隊の方がきてくれたんですが、自

衛隊の方々がびっくりしてました。もう道路が、主な道路が国道まで通じていたのを見て、こんな被災地ははじめて見たって。

あとですね、こういう話もあるんですよ。ヘリポートつくってまもなく、米軍の空母からヘリコプターが飛んできたんです。吉里吉里の私たちがつくったヘリポートに。で、パイロットがそのままの姿でズカズカと、(ヘリポートの)すぐ上が中学校ですから、中学校に乗り込んできたんですよ。ね、サングラスかけて。私はいなかったんだけど、あとで中学校の校長先生から聞いた話ですけど、最初になんといったと思いますか。What do you want? と言ったんですよ。「何がほしいんだ」って。どこからきたとか、俺はこういうものじゃないって、いきなり「何がほしいんだ」って。校長先生も面喰らってね、頭に思いつくやつをリストアップしたの。「オーケー」って帰ろうとしたんです。よけいなことは一切言わない。「オーケー」って言って。

校長先生が心配になって、「あなたたちから受け取った援助物資は、大槌町の行政にひとこと話を通して、それから私たちが受け取るような形にした方がいいんでしょね」って聞いたんです。そしたら、パイロットはですね、よけいなこと一切言わないで、「俺は吉里吉里に持ってくるんだ、吉里吉里で使え」っていったんですよ。そして、3日か4日かけて、すぐきたんですよ。それがみんな、吉里吉里の町の津波で被災した人たちに配られたんですよ。3日か4日でそうなったんです。だから、支援物資とか援助の仕方もかくあるべきだな、と私思いました。要請してから、町から県、県から国へ要請して、今度は国から県、町にきて、避難所に。すると、20日、1ヶ月以上かかるんですよ。ところが、4日で。もし私が助ける側の人間になったら、こういうお手伝いの仕方をやろうと思っています。そういう援助の仕方をやる。教えられましたね。

吉里吉里はやったんです。消防分団の消防車も、重機も、いろんなのを動かして。石油燃料も、一切外部との連絡がとれないんでね。災害対策本部も立ち上げる、地域の人たちで。最初きたマスコミの人たちがね、町の運営所だと思っていたんですよ。災害対策本部って名前だから。しかし実態は、吉里吉里地区避難所運営所みたいな感じで。そこで、道路確保とか、ヘリポート確保とか、そういうことをやったんです。

避難所で生活がはじまったころは、小学校の子供たちとか、たいして聞かない子がいっぱいいたんです。中学生も甘やかされてて。1ヶ月2ヶ月するうちに、自分たちで、「明かりがないからなんとかして下さい」って。電気の専門家が発電機から電気とって、片隅に、寝てる人に迷惑にならないように囲いして、テーブルおいて宿題なんかもはじめた。やっぱり怒鳴りつける大人たちがいるわけだ、自分の子供怒鳴るよ

うに。悪いことすれば。そうすると、だんだんだんだん子供たちの態度が良くなってくる。いろんなこと教えられますね。夜中ちょっとでもわがままに騒いだり、走ったりすると、怒鳴りつけるんですよ、まわりにいる大人たちが。だんだんだんだんわかってきてね。怒鳴る人たちが一生懸命外でやってることを見てるじゃないですか。で、いうこと聞くんですね（2011年6月12日）。

3.6 女性たちの活躍

男たちが戸外で活動しているあいだ、吉里吉里の女性たちは何をしていたのだろうか。彼女たちにゆだねられていたのは避難所の中の仕事だった。

ひとくちに避難所の中といっても、たくさん仕事があった。まず、大勢の人が寝泊まりしている体育館やトイレ、廊下などを清掃すること。初期には小学校の体育館に400人もの避難者がいただけに、清潔さを保つのは重要なことであった。それに加えて、病人が出ないように毎朝点呼もしていた。しかし、何より重要なのは、食事の用意と飲料水の確保だった。最初の夜はコンビニから提供されたペットボトルの水を飲んだが、そんなものでいつまでも足りるはずはない。小学校の上方には井戸のある家があったので、200メートルほど離れたその家から、毎日中学生にたのんでリヤカーで運んでもらった。食事の方も、最初は提供された米を炊いておにぎりをつくったが、せいぜいひとりに1個、小さなおにぎりを配ることができただけだった。もちろんそれでは足りないので、コンビニや商店から流出した菓子やジュースを集め、食べられそうなものを選んで配っていた。

「汚れてはいたんだけど、食べるには大丈夫だっていうものを、行方不明者を捜して歩いている人たちが学校に持ってきてくれたんです。それを洗って、それを利用しましたね。お菓子とか、そういうものを皆さんに、飲み物とかを。初めの1週間あたりは、やっぱりお菓子1つとか、おせんべい1つとか、飴1つとかって、お昼にみんなに食べさせたような記憶がありますけれどね。だから、その1週間までは本当に大変で」（2011年6月26日）。炊き出しに中心的な役割を果たした東屋幸子さんの話だ。

東屋さんたちの炊き出しが本格化したのは、被災から1週間して自衛隊が救援物資を運んでくれるようになってからだった。避難所には子供からお年寄りまでがいたので、みんなが食べられるような献立にしなくてはならないし、栄養にも配慮しなくてはならない。それに、数も問題だった。小学校への避難者は津波直後の400人をピークに減っていったが、避難所から親戚宅などに移った人もすべてを流されていたので、彼らの分も提供しなくてはならなかった。350人から400人分の食事を3食用意

する日々が100日あまりもつづいたのだ。「だから、おにぎりつくるのに12、3人で。つくるときはかかりましたけれども、ご飯炊くのが（もっと）大変でした。ご飯、はじめはガス釜がなくて。小学校の家庭科室に子供たちの調理用の鍋があったんですよ、1升炊きが。それで、コンロが2口のが4台あったので、8台のコンロで。それを3回か4回、そのコンロを使って、8つのコンロを4回ぐらい炊かせて、おにぎりつくったんですけど」。

炊き出しの責任者になった東屋さんは、3月11日の被災の夜から8月11日の避難所の閉鎖まで、5ヶ月のあいだ避難所で炊き出しをつづけた。「あっちに（小学校に）いるときは、先に自衛隊の人たちと一緒に出るお父さんたちに、100人ぐらいにご飯をおにぎりです出して。つぎは、30分後に体育館に避難している人たちに出して。そしてつぎには、医療の方たちもみんなボランティアできて、地元の人たちがいたので、その人たちにもご飯出して。小学校の先生方も全部いて、泊まってくれていたんで、学校の先生方にも出して。最後に、私たちが食べるのが8時半か9時だったんですけどね。9時ごろご飯食べて、そして後片付けすつと10時ごろになって。それが終わると、皆さん家も見なきゃなんないって、みんな下に下がっていくんですよ。

でも、つぎは昼の用意しなきゃいけないので、調べて、それ用意して。11時半ぐらいになると皆さんくるので、手伝ってもらって、またご飯を出して。人数も多かったんで、お昼出して後片付けすると、すぐ夕飯の支度しないと間に合わなかったんです。それで、夕飯の支度にかかって、で、最後に片付けて終わるのが8時。それから明日の準備をして、もう、私が自分の歯磨いたりなんかして体育館に帰るのが9時過ぎだった。そういう時間だったから、全然自分の時間っていうのがなくて。まあでも、やんなきゃなんないなと思って必死になってやったんで、別に悔いなく、苦労だとも思わないでね。自分のこと、みんなのことをとと思ってやったんで、別に苦労だと思わないで、やってきたんですよ」。

3.7 吉里吉里国誕生

100人を超える人びとが、それぞれの能力と技能に応じて活動を分担し、みなで話しあってその活動を調整して、より良い生活環境を築こうとする。そうした作業を5ヶ月も継続した吉里吉里の避難所は、見方によれば大きな一軒の家であり、見方によればミニサイズの独立国といえた。吉里吉里の避難所には「ボランティアお断り」の貼り紙が大きく張り出されていたが、それも当然であっただろう。自分たちのことは全部自分たちでできていた彼らにとって、「何かお手伝いできることはないですか」



写真7 吉里吉里避難所の前でがれきを薪にする（2011年6月4日撮影）

と言って押しかけるボランティアなど、迷惑以外の何ものでもなかったのだ。

避難所が家のようなものであるとすれば、どこでも誰でもおしゃべりをはじめるのは自然であった。避難所では和気あいあいとした雰囲気が支配していたので、盛岡市から避難者のことばに耳を傾ける「傾聴ボランティア」の一団体がきたときも、誰も相手にする避難者はいなかったで、彼らは手持無沙汰のままに帰っていった。また、こういうこともあった。ある日関西のNPO団体から、避難所でもプライバシーを守ることができるようにと、組み立て式の木製の間仕切りが送られてきた。阪神淡路大震災のときにはとても重宝されたものだとの触れ込みであった。しかし、避難民のあいだの仲のよかった吉里吉里の避難所では、「こんなものはいららない」と判断した。返すのも手間がかかるから、風呂の焚きつけにして燃やしてしまったのだ¹⁴⁾。

被災から1週間すると、自衛隊がたくさんの救援物資を運んでくるようになった。それをいったん預かり、避難所にいる人はもちろん、親戚宅などに避難している人に配布するのも避難所の災害対策本部の仕事だった。また、岩手県職員の深澤光さんが薪で風呂を沸かす大型のボイラーをもちこんだとき、それを受け入れる決定を出したのも対策本部だった。がれきの撤去をしている男たちが破壊された家々の廃材を集めてくれば、それを薪として活用することができる。湯船はいけす用の大型容器を転用

できるし、テントをかぶせれば女性も利用できる。

男女ふたつのテントに分かれたこの風呂は、避難者だけでなく、水道も電気も止まっていたので、地域の住民も入りにきて重宝がられた。他に風呂といえば、大槌町では自衛隊が設置した大型の風呂がひとつあっただけだったから、それは衛生面だけでなく、避難所暮らしで倦んだ人びとの精神的リフレッシュにも大いに貢献したのだ。「やれることをやってみようという気持ちじゃないですかね。それが結果的に、こういうふうな状態に発展してきたんじゃないかな。事実、薪ボイラーですね、これだって吉里吉里だけにきたわけじゃないんですよ。よその避難所まわってきているんです。状況おなじなんですけれども、そこでは設置がかなわなかったってことで、うちにきて。で、うちの場合は、まず電気はある。排水溝はなんとかなる。水は持ってこれる。材料は薪風呂ですから、我々が道路のがれき撤去する、それが燃料になるわけですから。やはりそのスタート考えれば、地元の連中がみずからがれき撤去したことが、結果としてつながったんじゃないかなっていう。ある意味ご褒美になったのかなって思いますよ」。芳賀廣樹さんの解釈だ。

がれきの廃材の釘をすべて抜き、長さを切りそろえてボイラー用の薪をつくる作業は、かなり面倒なものであり、多くの人手を必要とした。そのため、避難所では被災後3ヶ月頃からボランティアを受け入れ、避難者と一緒に共同作業をおこなうようになった(写真7)。そのなかのひとりが、この薪を売って復興資金に供することを提案した。「吉里吉里国復活の薪プロジェクト」と呼ばれたそれは、マスコミに取り上げられるなどして予想以上の反響を呼び、5,000袋以上の薪の注文が殺到して断ることを余儀なくされるほどであった。がれきの撤去からはじまったそうした活動は、海を守るための地域の森林の保全と、間伐材を活用した新たな事業を起こすことをめざす「NPO法人吉里吉里国」へと発展していったのだった。

怪我人の搬出のためのヘリポートの設置をはじめ、行方不明者の搜索や、飲料水や食料の準備、電気の確保、そして風呂の設置にいたるまで、被災者には多くの課題が待ち受けていた。しかし吉里吉里では、大勢の人間が各自の能力を存分に発揮し、なおかつたがいに協力しあうことで、それらの困難をひとつひとつ乗り越えていった。そのようにして彼らは、ゼロからはじまった避難所での生活を耐えうるものにしていったと同時に、彼らの活動から誕生した新たな団体を立ちあげるなどして、将来へ向かう萌芽を築きあげたのだった。



写真 8 安渡小学校避難所（2011年4月13日撮影）

3.8 安渡地区の避難所

吉里吉里ほど住民の団結が徹底したところではなかったが、赤浜や安渡といった他の海辺の集落の避難所でも、住民のあいだの緊密な協力が実現されていた。それらの集落の避難所では、被災後すぐに対策本部を立ち上げ、避難者どうしが協力しあうことで、被災後の一連の困難を乗り越えていったのだった。そのうち、安渡地区のケースを見ていこう¹⁵⁾。

安渡地区は被災前の人口1,950。西から順に1丁目から3丁目までの3つの町内会があり、港のそばに港町と新港町の2つがある。安渡はもともと大槌川の河口の砂州に築かれた集落であり、過去には大槌川をさかのぼる鮭をとらえるための網漁が盛んにおこなわれていた。近年になって鮭漁より水産加工業が盛んになって、集落における漁の経済的位置は低下したが、「大槌トンビに安渡カラス」ということばが示すように、安渡の人間は「群れる」傾向があるとされる。そのことが、各避難所の運営と避難所どうしの連携がうまくいった理由のひとつだと安渡の人びとは考えている。それに対し、江戸時代に代官所が置かれていた大槌の人間は一種傲岸であり、独立独歩の精神を持つ傾向があるために、避難所の運営に苦勞したというのだ。

安渡の主要部分は砂州の上であり、砂州を凸状に囲む谷が急激に落ち込んでいるので、家々の多くは低い土地の上に建てられている。そのため今回の震災では、全家屋824戸に対し、68パーセントに相当する562戸が全半壊地するなど、甚大な被害を出している（岩手県大槌町2011）。住宅の3分の2が流出し、しかも地震ののちも余震がつづいて、いつなるとき津波が再発しないともかぎらなかったので、集落のほとんどの住民が避難所に避難したのだった。

なかでも最大の避難所になった安渡小学校では、授業の邪魔にならないよう体育館が避難所として指定されていた（写真8）。しかし、津波の夜に500名が避難し、さらに他所から移ってくる人間もいて最大で800名を超えたので、とても体育館だけでは収容できなくなった。それで学校長と話し合っ、地震で損傷しなかった教室をすべて解放して避難者を収容することにした。

町役場の生涯学習課の佐々木健さんがこの避難所の担当であったので、彼の強い勧めもあり、津波の翌々日には町内会を中心に対策本部を立ち上げた。避難者の多くを占める安渡2丁目町内会の自主防災組織の長である佐藤稲満さんを本部長に選出したほか、複数の副本部長と、炊き出しに当たる給食班と水や食料の確保をめざす物資班の2つの班をおくことを決定した。それに加えて、毎朝、朝礼をひらいて役員や避難者のあいだの連絡をとりあうこと、また安渡小以外の避難所でも対策本部を立ち上げ、代表者が安渡小学校の避難所での朝礼に出席することで、たがいの連携を強化することを決めたのだった。

どの避難所でもおなじことだが、最初に生じた課題は食料と飲料水の確保であった。安渡地区は谷がちの地区なので、沢水が多い。安渡小学校の上の沢水は良質であることを地元の彼らは知っていたので、その上澄みの部分を飲用にし、下の部分は体や衣類を洗うのに使用することにした。食事の方は、自主防災組織の炊き出しの設備をもちい、蓄えていた米を使用しておにぎりをつくった。蓄えが十分ではなかったので心配だったが、さいわい小学校の裏側の道を通って内陸の集落の人びとが米を運び込んでくれたので、欠乏におちいることはなかった。調理を担当したのは避難者の中の5、6名の女性であり、彼女たちは避難所が閉鎖されるまで約5ヶ月のあいだ、食事を提供しつづけたのだった。

一番困ったのはトイレだった。小学校のトイレは水洗だが、水道が止まっているので水を流すことができない。それで、学校の裏手や校庭に穴を掘り、そこに大きな管を埋めて、ブルーシートでまわりを囲ってトイレとした。副本部長のひとりであった小国武さんは、そのときの苦勞を語っている。「トイレも自分たちでつくったんです

よ。だって、最初はトイレあるわけじゃないし、水洗使えないから。だから土を掘って、そこに管を埋めて、ブルーシートで張ってつくったんですよ。学校の脇とか学校のグラウンド。大変でしたよ、これは。ええ、これには一番参ったね。それには参りましたが、でも、嫌いとかなんとかいってらんないんだものね。みんなのためにやんなきゃなんないんから、率先してやりましたよ。スコップで穴掘ったり、それをまあ、用を済ませば海に放ったり」(2011年8月5日)。

自衛隊が安渡小学校に入ったのは、津波から5日ほどした後だった。自衛隊はただちにがれきの撤去と地域の行方不明者の捜索をはじめたほか、大量の食料や飲料水、着替え等を持ち込んでくれた。しかし、他の避難所とのあいだの道はまだ開かれていなかったで、すべての救援物資を小学校に集め、他の避難所にも人数に応じて配布することにした。逆にいえばそのことが、他の避難所から小学校へと避難者が移ってきた理由でもあった。その結果、被災の夜に500人だった避難者は、最大で800人までふくれあがったのだった。

安渡小学校の対策本部は、一緒に避難していた中国からの研修生が他の日本人避難者とのあいだで騒ぎを起こすなどの問題を抱えながらも、避難所の運営を無事に乗り切った。そして、8月11日に避難者全員を仮設住宅へと送り出すことで、その活動を停止したのだった。

一方、この避難所は、役場から派遣されていた開放的な性格の佐々木健さんの意向もあって、早いうちから外部のボランティアを受け入れていた。東京に本部のあるNPO「パレスチナの子供キャンペーン」と花巻市からきた「ゆいっこ」の2団体は、小学校の校庭の片隅にテントを張って活動をおこなっていたし、外部のボランティアによる炊き出しや子供の世話、花壇の制作、傾聴ボランティアの訪問などもくり返しおこなわれていた。しかし、そのことが軋轢を引き起こしたのも事実だった。被災から3ヶ月たった6月中旬、横浜市からきたあるボランティア集団はカレーライスとうどんの炊き出しをおこなったが、避難者のあいだでは評価は低かった。舌の肥えていた彼らに、提供された食事はあわなかったのだ。

安渡地区の出身で、炊き出しをおこなった団体との仲介の労をとっていた赤崎友洋さんはつぎのようにいっている。「どっちにも問題があったと思うんすよ。避難者の方は炊き出し慣れしてしまっていて、うまくないといって食事をどぶに捨てただけで、それはやっぱりいけないでしょ。ボランティアの方も、感謝が少ないと不満を言っていたけど、そもそもボランティアってのは感謝してもらうためにやるものではないですよ。もう炊き出しはいらないうすよ。食事を準備して、避難した人たちに

食べさせてあげるっていうのはね。できたらバーベキューみたいな、支援する人が材料を提供して、支援される人が働いて一緒に食べるっていう、そういうかたちが理想なんすけどね」(2011年6月22日)。

ボランティアは無償で働いているのだからといって、無条件に善とされる傾向があるが、そうとばかりはいえない。善意という美名の背後に、与える側と与えられる側という非対称的な関係性が再生産かつ固定化され、そのことが被災者の心をむしばんでいく危険性が潜んでいることを、この事例は示しているのだ。

4 山側の地区の避難所

4.1 かみよ稲穂館

海辺の集落が大きな被害を出していたのに対し、大槌町の山側に位置する金澤、小鎚、臼澤などの集落は、今回の震災と津波で被害を出すことがなかったかわりに、全壊した町方から多くの避難者を複数の施設に受け入れた。情に厚い大槌町の在の人びとは、すべてを失った彼らをあたたかく受け入れ、食事や寝泊りする場所の提供をおこなったのであり、それは見返りをまったく求めない無償の行為であった。

一方、町方から逃げてきた避難者たちは、出身の町内会や各種のつながりとは無関係に集まってきていたので、たがいに意志疎通することができず、避難当初は大きな混乱が生じていた。「町からきた人でも、顔は知っているけど、話したこともないという人が多いんですよ。(大槌のような)小さい町でもね。だから、コミュニケーションが全然取れないんです。それで、最初は本当はかなりパニック状態になっていて。とにかく、みんなわかっているんだけどね」。金澤地区のかみよ稲穂館に避難した沢館英次さんのことばだ(2011年6月15日)。

かみよ稲穂館に避難した町方の人びとに対し、施設の周囲の人びとは翌日から炊き出しをしてくれたが、問題は水だった。水道が止まっていたので、飲み水やトイレの水がない。それで彼らは施設の裏の沢水を飲んだのだが、それが悪かった。「ここに避難したあとにね、水がないから沢水を飲んだんですね、みんな。そしたら、下痢と嘔吐がすごかったです。普段、私たちも地下水は飲んでますけれども、また違った状態ですね。本当に大変でした。下痢になった人は隔離して、この部屋にいっぱいになりました。そういう経験をしました」。飲み水だけでなく、トイレにしても水がないので流すことができない。沢水を汲んできて溜めておけば良いのだが、最初のころは

自発的にそうする人はいなかった。それで、トイレも最初のころは汚れ放題汚れていたのだった。

しかし、時間が経過するとともに、地元住人の支援や配慮に対する感謝の気持ちもあり、多くの人びとは利己心を捨てて共同生活を維持するようになっていった。避難所の規模がそれほど大きくなく、せいぜい200人程度の収容で済んだことも、避難者のあいだの相互理解が進み、避難所の運営がうまくいくようになった理由のひとつだった。「本当にいい人にめぐりあいましたね。ここの部落の町内会の人たちはね、本当に。ここの被災者は、一晩ぐらいは飢えをしのいだんですけれども、2日目からはもうおにぎりの炊き出しができてね。よかったです、ほんと」。

「ほとんどの人の名前を知ったし、名前を知って、この人の家はどこだったとか、この人は（家族が）全部亡くなったとか。そういう大体の情報は知ったから、いろいろなコミュニケーションがとれるんですね。（最初は）役場職員が2人おったけど、役場の方もあれだから、役場職員が帰ってしまって。あとはこっちの避難の人たちで組織をつくって動いたちゅうか。それで、スムーズに行くようになったっていうね」。沢館さんと一緒に避難していた佐々木和夫さんはそう振り返っている（2011年6月15日）。そのような組織ができあがり、みなが分担してトイレの清掃や水汲み、交通の整理などを率先してやるようになるまでには、1ヶ月ほどの混乱の時間が経過していた。

さまざまな町会から逃げてきたバラバラの人びとを、地域の地域社会があたたかく迎え入れ、彼らをとりに込むかたちで避難所の運営を円滑に進めていったというのは、大槌町の特徴といってもよい現象だ。他の市町村ではどのようなかたちで避難所の運営がおこなわれていたかの情報が不足しているが、行政の機能がほぼ完全にストップしていた大槌町では、そうした住民の思いやりや被災前から存在した地域的つながりこそが、秩序の空白を埋め合わせていたのだった。

なかでも最良の事例は、白澤地区の鹿子踊保存会伝承館であろう。鹿子踊（ししおどり）とは、木を削ってつくった鹿頭をかぶり、背にどろの木をかんなで削った長い「かんながら」を垂らして舞う勇壮な舞いであり、岩手県から宮城県にかけて広く分布する郷土芸能のひとつだ¹⁶⁾。白澤地区に昔から伝えられてきたこの鹿子踊の保存と発展のために、集落の人びとが金や労力を出しあって建設したこの施設は、町の施設ではないので、被災前に避難所の指定は受けていなかった。しかし、白澤地区の人びとは町方から逃げてきた人を拒むどころか、あたたかく受け入れ、さらには励まし指導していくことで、吉里吉里とならんで大槌町でもっとも見事な避難所の組織化を実

現したのだった。

4.2 白澤鹿子踊保存会伝承館

白澤鹿子踊保存会の役員で、避難所に設置された対策本部の本部長を5ヶ月間つとめた東梅英夫さんに、この施設が避難所として機能した当初から、日々の運営、そして5ヶ月語の閉鎖にいたるまでの経緯をたずねることにしよう。地震当日、町方から避難してきた人びとをあたたく受け入れただけでなく、被災の夜には600人分ものおにぎりを地元の人間が集まって握って、近くの避難所や町方の体育館にまで持って行ったというその話には胸を打つものがある。彼は釜石市での会合の途中で地震に遭遇し、津波で破壊されたいくつもの集落をすり抜けながら大槌町まで戻ってきたのだった。

釜石の製鉄所の施設の2階で打ち合わせをしていたんですが、そこで地震があって。で、ああいう状況だから、「みんな出ろ出ろ」ってことで外へ出て。「ああ、大きかったねえ」って。「じゃあ今日は終わりだね」ってことで、車に飛び乗ってエンジンかけたら、ちょうど14時55分だったんです。もう、すぐに乗ったつもりだったけど、(地震から)8分、9分かかってたんですよ。

それで、こんなときは裏通りに行くよりは、大通りに行く方が正解だなと思って、大通りに入ってずっと釜石の町抜けて。信号はもう全部消えてましたから、ラジオをばんばんかけながら。大津波警報だって言うんです。で、途中両石というところにきたらば、「第一波が観測されました」って。記憶では「宮古で50センチ、大船渡で20センチ」って言ったような記憶があんだけど。で、ずーっと戻ってきて。

そしたら、バラバラと車がきた。「避難させて下さい」って。メンバーのじいちゃんばあちゃんが「ああ、どうぞどうぞ」って。そのうちにまた、わらわらっとくる。えーっと思って、「じゃあ、見てくるわ」って行ったら、すれ違いざまにきた車は、「大変な状態だ」と。すぐに戻って、走って、うちの女房をはじめ、隣のお母さんやら周辺のお母さん方に声をかけてね。大変だから、炊き出しの準備しなきゃいけないから、「まず米を頼む」って。そういつてぐるっとまわって、戻ってきたらば、もう数十人ですね、人が。で、「寒いから、とにかく中に入って」ってことで入れて。それからはもう戦争状態。

で、その晩からですね。お祭りのために食べ物をつくる装置があったし。当然停電してて水は出ない。けど、昔からここは沢水を各家庭に入れてまして、今でも毎分1

トン以上は各家庭に水が出るような状態。その水がある。そして、自分が一回りして戻ってきたら、軽自動車のトラックに米をどんと積んだ近所のじっちゃんが、もう車をここに連れてきている。米を下ろして、即、ご飯をおにぎりにして。その晩には人員の把握はできなかつたんですけども、みんな寄せ合って、寄せ合って。自分らもある分の毛布は出したり。で、みんなでくっつけあって暮らして。だけど、その晩からいろいろな情報が入ってきて、遠くの情報も断絶状態でわからなかつたんですけども、「どうもその辺で、車の中に寝ている人もいるらしい。飯なんか食ってないらしい」って。「じゃあ再度飯握って、みんなにおにぎり渡して歩かなければ」ということで。

そしたら、避難したひとりが、「あんたリュックサック持っているよな、貸してよ」って。それに入れておにぎりを運ぶんだと。「どうやって行くんだ」「いや、大丈夫、俺わかっているから。山越えて行けば、がれきの上歩かなくてもいいから」ってことで。それで懐中電灯持って、リュックサックのなかに段ボールを入れて、おにぎりを突っ込んで（城山まで行った）。あと、別なグループはその辺に持って行って、車の窓を叩いて「はい、おにぎりだよ」って出して。最初の晩からそうだったんで。翌日からは状況もだいたいわかってきたし、休みなしでご飯の炊き出しやっていましたね。本当に大変だったんですけども。

あと、どうも情報がわからないし、いろんな情報があつて、ほんとなのか嘘なのか、このままじゃ收拾がつかないということで、2、3の人と相談して、8名をピックアップして。で、われわれがスタッフになつてものごとを進めて行こうと。「まあ、せいぜい2週間が勝負だ」って。こんな長くなるとは思わなかつたんですよ。「2、3週間が勝負だから、それまでだ」って言って。代表の役は大津町役場のOBの方にやってもらって、皆さんにもわかりやすいように、お祭りの時に使った腕章にマジックで伝承館避難所スタッフって書いて、みんな腕章つけて。で、皆さんにも、「この腕章つけた人たちの指示に従って下さい。何かあつたら、この腕章の人に言って下さい」って。それがすごくよかつたんですね。それで皆さんも落ち着いて、言いたいことあれば落ち着いて言うし。

ただ、そうやった以上、われわれがたしかな情報をキャッチしておかないと混乱の元になるってことで、（大植町の）対策本部行きになつたの、山越えて。えらい遠回りだったのですが、そこへ朝と晩と定期的に2人以上のチームで行きました。とにかく情報収集と、こちらの状況の伝達ということで。それは4月いっぱいづづけました。そんな関係で、本来避難所って位置づけではなかつただけけれど、早期に町の方

にも避難所として認めてもらって、支援物資も直接届けてもらうようになったという。そういうところが、結果論だったのですが、タイムリーに物事が進められたんだと。

一方で、メンバーの人たちは、(震災から)2日目の12日には、避難した人たちの通院状況やら薬の名前やらを聞いて、とりあえず盛岡に走るガソリンを融通して。そして盛岡の岩手医大、赤十字病院、あともう1ヶ所どこだったかな、3、4ヶ所まわって、当面の薬をほぼ調達して。朝出て、帰ったのが夜遅かったですね。それで薬も調達して。ですから、混乱がなかったっていうか、大変な事態ではあったんですが、そういう対応がよかったから、皆さんも安心してパニック状態に陥らないで。皆さんも協力的に、なんか気づけば「こうじゃないですか」って意見もしてくれたし。まあ、スムーズに行きましたね。

盛岡に行ったのは1回で済みました。その時にカンパをお願いしまして、1万円出してくれた人もいたし、3,000円ぐらいの人もおったのですけれども。結局、行ったらば、薬代は病院からは請求されなくて。些細ながらガソリンも調達して。ですから、このカンパのお金は返して。そのうちに、お医者さんもすぐその避難所に避難かたがた診察してくれて、そのお医者さんから薬を調達できたので、本当に数日分、初期の分の対応。それはできたからよかったなと思ってます。

こっちはね、朝、昼、晩と、あたたかいご飯炊いて食べてたんです。よそもそうしているだろうと思っていた。ただ、そばの弓道場と桜木町っていうところの集会所。そこはどうも困っているらしいというのは、最初の晩から聞いたんだけど。そんなことは、ここでは初日からやっているんだから、1日2日たったらやれるだろうって認識でね。こういう時代だから、1週間、2週間辛抱すればなんとかなると思ったんですけれども。

自衛隊が入ったのは1週間後ぐらいだったと思いますよ。それからは心配なく入るようになってね。逆にですね、3月の末から、「これ、コントロールしないで、どんどんどんどんいただきますってやってたら、オーバーフローするね」って、逆にそっちの方を心配しましたね。

結果的に運営がうまくいったというだけではあったんですけど、やっぱり最初のときにスタッフを組織して、適正適材というか、会長さんには行政の経験者を立てて。それから、2、3日後からかな、外で朝ご飯食べる前にミーティングしようと。6時半にNHKのラジオ体操がありまして、みんなで体操して、体操が終わったらば、「おはようございます」と。それで、昨日までの状況や、今日以降の予定、それから「皆

さん何かないですか」。で、なかったら「今日1日頑張ろう」って。そういう朝ミーティングを毎日して。その他に、スタッフのミーティングをして。さらに、20日に1度の頻度で全体のお話を聞く、全体ミーティングをして。

だから、ここに住んでいる人たちのニーズをたがいに知り得て、それに沿って動いていったから、不満もなくて。ただ、私が思っているのは、若い人が偶然（多く）避難してくれたこと。それから、健康体の人たちが多かったということ。あと、そういう関係で、手伝う人もなんとなく手伝いやすくて、女の人も男の人もみなが役割を持ってくれて。そういう部分で、なんかなごやかかっていうか、自分らのことのように活発に動いてくれたんで。（運営が）うまくいったのは、そういう体制もさることながら、適正人数だったんじゃないでしょうか。

こんな長期戦になるなんてのは、全然思いもよらなかったんですよ。でも、疲れるってことはなかったですね。「疲れるなよ」とか、「大変だよな」って言うけど。うん、ひとりでやってるわけでもないし。ですから、何にも悩むこともないし、淡々とやれる程度のことをやってきたわけだから。

（鹿子踊の組織があったことが大きかったのかとたずねると）、それはたしかにね。自分らも、現役の時は100人とか200人の中での生活っていうか、そういうものの体験はあったし。女性軍も、祭りの時は100人の人がわっと集まって、ご飯食べさせた、何したっていう体験もあって。それが一番、後からの考えですけども、訓練になっていた。だからスムーズに行ったんじゃないかな。分担して、ご飯とかそういうのは女性軍の専権事項にして、われわれ口出さなかったんです。女性軍もやっぱり任されてるから、いちいち指示を待たないで自主的に動いてくれたし（2011年6月18日）。

4.3 白澤鹿子踊伝承館の成功の秘訣

この白澤鹿子踊保存会伝承館には126名が避難していたが、この施設にはもともとそれだけの人数を受け入れるだけのスペースがあったし、祭りの日に集まる舞い手や家族のためにかなりの数の食器や炊事道具がそろっていた。それで、最初の日から避難者にはおにぎりではなく、白いご飯とみそ汁と副食を碗や皿に入れて出すことができたのだった。東梅さんとともに対策本部の役員を引き受けた地元の白澤正男さんは、つぎのように言っている。「ここで食べ物は全然困らなかったね。ここは。よそは毎日おにぎり食べてたけど、ほとんど最初から茶碗とみそ汁とで食べてました。ここはね、それなりの茶碗とか道具とかもありましたからね」（2011年8月4日）。

この避難所は雰囲気がとてもよく、毎日3度バランスのとれた食事が提供されてい



写真9 学校が使用できないので屋根のある相撲場でおこなわれていた中学生対象の補習授業。左側の建物は遺体安置所（2011年4月16日撮影）

たし、朝のラジオ体操と朝礼からはじまり夜の消灯にいたるまで、明確な秩序が支配していた。しかも、それだけでなく、他所からきたボランティアや研究者を泊めてやったり、避難者がボランティア活動をおこなえるように支援をするなど、避難所という以上の外部に開かれた活動をおこなっていた。

もと釜石市の職員で、津波から逃げ遅れたために何度も危機的な状況を奇跡的に生き延びたのちに、この避難所にたどりついた白澤良一さんも、そうした支援を受けたひとりだった。彼は被災者の雇用と相互理解の進展のために「まごころ広場」や「まごころの里」をつくり、死者を慰めるために各地の郷土芸能を集めた「三陸海の盆」を毎年8月11日に開催するなど、さまざまな活動を今日までおこなっている。それに加えて、被災から立ち上がるために、時期尚早との声もある中で、いち早く鹿子踊を復活させたのも彼とこの伝承館のメンバーであった。

その日のことを振り返って、白澤さんはこう語っている。「4月27日と、それから5月の1日に鹿子踊を伝承館でやったんですが、あの時に異様な雰囲気になったんですね。それは何かって言うと、鹿子踊を舞ったときに、踊っている人も奥さんを亡くしたり、いとこや親戚を亡くしたり、財産を亡くしたり。それを見ている人もおなじ

ような人たちですね。見ている人も舞っている人も、おなじ境遇なんですけど、それがあそこ現場でひとつになっているんですね。踊っている人と見ている人とが一体化して、あの空間が、もうなんていうか異様な雰囲気。その時、取材しているカメラマンも涙を流しながら取材している、カメラを回しているんですね。衣装も流され、何もかも流されたので、そんなことやっている暇がないって話をいわれたんですけど。でも、今だからこそそれをやらないと、あんたたちもチャンスがないでしょうって。踊ることによって、見ている人にも勇気を与えるので、やって下さいって説得して」(2011年6月15日)。

この臼澤鹿子踊伝承館の運営がうまくいったことの理由は、いくつか考えられる。地区に数軒の農家があって蓄えがあったので、自衛隊の救援物資が入るまでの食料の確保ができたこと。沢水が十分にあって、飲料水の問題がなかったこと。祭りの実施にそなえて組織と道具があり、多くの人間を受け入れるだけの準備と経験があったこと。避難者の数が126名を越えず、毎日ミーティングをもったので、避難者や地元の人とのあいだの意思疎通が円滑におこなわれたこと。避難者のあいだに鹿子踊保存会の関係者がいたので、保存会が中心となった組織と役割が受け入れられやすかったこと。それに何より大きかったのは、避難者たちを受け入れた地域社会の人びとのリーダーシップであっただろう。地元から対策本部に入った臼澤正男さんはこう語っている。「それはもうね、誰かがやらなければさ。なんぼこの地域にしても、ここの地域の人がやんなきゃさ。知らん人が勝手にやっても、なかなかできないからさ。そういう点でも、問題はよその人から見ればなかったと思うんだよね。何も、いざござなしで」。

4.4 大槌高校

地元の組織がまずしっかりと存在し、それがバラバラな避難者の受け入れに大きく貢献したというのは、一時1,000人も避難者を受け入れた大槌高校でも見られた現象だった。町方から見ると、津波を一定程度食い止めたバイパス道路のすぐ向こうに位置する大槌高校は、小さな丘の上にあることもあって、町方からの避難者が第一にめざした場所であった(図1参照)。それでそこには、城山の体育館と並んで大勢の避難者が逃げ込んだのだった。

地震のあった3月11日は、大槌高校では卒業式が済んだばかりで、3年生はいなくなっていたが、1年生と2年生対象の半日授業がおこなわれていた。地震のあった午後2時42分は放課後にあたっていたので、半分程度の生徒がクラブ活動をおこ

なっていたほか、教員も全員学校に残っていた。そこを地震と津波が襲い、がれきが下の道路をふさいでしまったので帰ることができなくなり、生徒と教員はそのまま高校にとどまった。教員は非常勤も含めて34人いたが、学校長を含めた21人が被災して家を流されたので、彼らも被災者として高校に避難することになったのだった。

一方、大槌高校が恵まれていたのは、津波が破壊した地域のすぐ外側に位置していたので、市街地を襲った火災を免れることができただけでなく、津波の翌朝から自衛隊の支援が入ったことだった。津波の翌朝3時の自衛隊の到着を、当時の校長である高橋和夫先生はつぎのように語っている。

自衛隊には本当に助けられました。というのはですね、(高校に)あがってくる道路が2通りあるんですけども、それがもうどちらも通れなくなったんですよ。こっち(海側)はですね、もう船とかも流れてきてましたし、こっちが通れるようになるまでには時間がかかりました。そっち(山側)の方はですね、県道26号線が通っていて、遠野とか盛岡とかに行ける道路あるんですよ。で、入口のところに製材所があるんですね。そこの木材が流されて、道路ふさいだんですよ。だからもう、津波直後はどっちも通れないって状況になって。私も教務主任と2人でおりて行って、状況確認しました。材木が散乱しているものですから、とにかく道路確保しないとイケないということですね。で、明るくなったら職員で行って片付けようという話をしていたんです。

そしたら、夜中の3時ごろですね、12日の夜中の3時ごろ、自衛隊の方が3人あがってきました。もちろん車は通れないので、歩いてあがってきたんです。そしたら、下の方に自衛隊が30名ぐらいいるんだということですね。それで、とにかく道路確保したいので、その材木の撤去をお願いしたんです。そしたら、もう朝の6時くらいには撤去していただきまして、車であがってきました。そして、自衛隊の方からも食料提供していただいて、乾パンと缶詰ですね。あと、栄養剤みたいなものもありました。それをいただいて、そして12日の朝から本当にわずかずつでしたけれども被害者の方に配って。で、お昼もその残りを配って。その12日の夕方から炊き出しがはじまりました。

ここは一応、避難場所にはなってます。ただし、基本的に一時的な避難場所ということで、長期間避難するという場所ではなかったんですね。ですから、備蓄しているものは何もないわけですよ。学校ですので、学校に長期にわたって避難するということは、教育活動上できないわけですよ。

ところが、地震のあとには1,000人近く避難していましたね。避難者名簿を見ると1,000人は超えているんですけども、実際に寝泊まりしていたのは1,000人はいかなかったですね。結局、避難者名簿作るってことは非常に大事なことで、とにかく本校に避難した方には避難者名簿に名前書いてもらったんです。で、それを掲示したんですよ。そうすると、家族とか知り合いとか、安否確認のためにたくさんこられましたので、で、名前が書いてあるっていうことは元気だよということなんです。ということで、一時的に避難した方には名前を書いてもらいまして、それが1,000人超えました。

(避難者の)住む場所ですが、2つの体育館ですね。あとは一部、普通教室の方にも入ってもらいました。当初は15(の教室全部)ではないんですけども、だんだんと人数が増えていったんでね。初日は500人ぐらいですよ。12日になってだんだんと増えてきたんです。13日になって870と増えてきたんですけどもね。

一番私たちが悩まされたのは、病人対応ですね。津波に流された時に、なんとか屋根につかまって、で、一晩その屋根の上で過ごして助けられたっていう女性の方が運ばれてきましてね。ほんとうにもう冷え切った状態ですので、保健室の方で処置してもらったっていうか、もう温めるしかないんですけどもね。それから、透析してる方がいたんですよ。なんともしようがないので、自衛隊にお願いして、ドクターヘリで釜石市の病院に運んでもらいました。あとは、高血圧、糖尿病とか、精神安定剤飲んでる方もいましてね、薬求めてくるんですよ。これはもう何ともできなかったのですね。ほんとうにね。

こういうことがあったんですよ。12日の夜7時ごろですかね。ひとりのおばあさんが本部の方に来て、本部は職員玄関を本部にしてたんですけども、そこにひとりのおばあさんがきて、血液の病気の薬を飲んでるっていう。その薬を飲んでると血液がサラサラになるというのですね。で、「その薬を昨日から飲んでない。これ飲みつづけないと、へたすると脳梗塞になる」っていうふうな話をされてね。その方は70歳ぐらいですかね、身寄りがないっていうんですよ。で、その方はですね、本校の職員にお願いして盛岡の救急センターまで運んでもらいました。車で、夜中ですね。

その時にですね、本校に避難している避難者の名簿を掲示していたんですけども、それをうちの職員が全部書き写して、岩手県の対策本部に届けました。で、これが新聞とかに、大槌高校避難所に避難している方ということで出ました。それは、おばあさんを搬送するついでに、その名簿も届けたということです。あとは、何が必要



写真10 大槌災害対策本部の入り口もがれきでおおわれている（2011年4月20日撮影）

かというのを全部こうメモしましてね、それも対策本部に届けたということですね。

私たちもですね、学校の一部を避難場所として提供するだけですと、私たちは本来の業務やりますよというふうにできればよかったですけれども、それができなかったんですね。なぜかという、私たちが避難者だからです。非常勤職員入れて34人昨年度いたんですが、そのうちの21人が家流されていますので、住むところがないんです。私はここで1ヶ月寝泊まりしてました。学校に寝泊まりしててね、「避難所の方は避難者が自分たちでやって下さい」ってわけにはいかないんですよ。私たちがって食べなきゃならないんですしね。結局、私たちがやっていたんです。職員が全部やったわけです。

4月の20日に始業式やったんですよ。ということは、生徒がくるわけです。そのためには、教室に入っている避難者の方に別な場所に移ってもらわなきゃならないわけですよ。全部の教室に入ってしまったから。そして、4月の19日には第一体育館に避難者270名入ってもらって、そこで自治会ができたんです、はじめて。それまでは、体育館に入っている方々はグループ分けしてですね、班長さんを決めて班長会議をやったり、班長さんにいろいろお願いしたり、指示したりっていうことはやってきました。それを指示するのは私たちです。

本当に、あの震災で生徒たち全部がたくましくなったなっていうのがありますね。いろんな活動やってきたんですけど。一番うれしかったのは、自分が何できるんだろうかって考えてね、で、自分たちでやってくれたことですね。生徒の活動はいろいろあるんですけども、トイレ用の水くみとか、あと食事の配膳、食器洗いですね。食器洗いについては、私は本当にここまでやらせてしまってという思いがありました。当初は本当に食器も少なくてですね、おかゆとかよそって配るとき、避難者分のお椀とかないわけですよ。それを、最初に食べた方は返してもらって、それを洗ってすすいで、で次の人に出すわけです。これ、生徒がやってくれたんですよ。冷たい水ですよ、手を赤くしてやっているんですよ。冷たいけれどもやってくれてね。本当にこう、いろんなことをお手伝いしてくれましてね。そういうの見てね、本当にたくましくなったなっていう感じはしますね（2011年8月4日）。

5 結束を実現できなかった町方の避難所

5.1 城山の体育館

地域コミュニティの結束をもとに避難所を維持した海辺の集落や、地元のコミュニティや組織が町方から逃げてきた避難者を取り込むかたちで避難所を運営した山側の集落に対し、町方に設置された避難所ではどのような運営がなされていたのか。

町方では、一時1,000人以上を収容していた城山の体育館をはじめ、大ケ口の集会場や寺野の弓道場などに300人前後の避難者がとどまっていた。町方でも上町や本町のように被災前には町内会や町内を基礎とする郷土芸能の団体がいくつも機能し、住民のあいだの結束や連携ができていたところもあった。しかし、津波によって町内会や団体の中心人物が亡くなったり、住民の多くが何度か避難所を移動させられたりしたこともあり、人びとのあいだの結びつきは失われてしまっていた。先に沢館さんが発言していたように、「コミュニケーションが全然取れない」ので、パニック状態に陥っていたのだった（写真11）。

とはいえ、そうした事態を改善しようという試みが何もなかったわけではなかった。町方の避難所の多くには役場の職員が入って対策本部を設置するなどした。しかし、津波によってすべての制度が破壊されてしまったために、一から制度を再建するという重荷を負わされていた彼らに何ができただろう。しかも彼らは、遺体の確認作業から、遺体安置所の管理、社会的弱者の保護、そして水道や道路の補修や各種の証



写真 11 指定避難所であったが全壊した大槌小学校（2011年4月20日撮影）

明書の発行にいたるまで、山のように仕事があった。そのため、避難所に派遣された役場の職員は2、3日のローテーションで移動しており、これでは避難者との円滑なコミュニケーションを確立したり避難所に秩序をつくり出したりすることができないのは当然であった¹⁷⁾。

私はこれらの避難所もまわって話を聞こうとした。しかし避難者たちは、運営に不満がある反面、他所に行くこともできない避難所の実態についてあまり口をききたがらず、以下のような断片的な情報が入ってきただけだった。町方の高台にある城山の体育館や中央公民館は避難所に指定されていたはずなのに、毛布や食料の備蓄がなく、人びとは窓のカーテンを破いたり新聞紙を体に巻きつけたりして暖をとっていたこと。これらの避難所には食料は何もなく、臼澤の伝承館などから運び込まれたおにぎり1個を、5、6人で分け合って食べていたこと。

その一方で、避難所では我勝ちに行動する人間が大勢いて、良い場所の確保や毛布やカーテンの奪い合いで罵声や怒声があいついでいたこと。避難者のあいだでしばしば盗みが生じ、なかには車を盗まれていた人さえいたこと。対策本部とは名ばかりで、避難者自身による炊き出しはおこなわれず、夜は自衛隊等が提供する弁当を食べていたほか、朝と昼は外部の支援者が炊き出しをしてくれなければ、避難者自身でや

りくりしなくてはならなかったこと。

最初、城山の体育館に避難していた沢館さんは、被災の夜とつぎの2日間に生じていたことを、こう思い出している。「食べるものは全然なくてね、知り合いがね（言葉詰まらせる）。あのね、本当にさっきもいったけど、おにぎりがひとつあるわけですよ、小さいね。まあ、あの誰かが持ってきてね。そしてひとつあると、それをこう。寒いから毛布をかけて5、6人固まっておるんですよ。そうすると割って、また割って、5、6人で一口食べるくらいだったんです。最初はね、一口食べればいってくらいね」。

私自身、町方の避難所で作業をしているときに、緊張を強いられるような場面に何度か立ち会っている。被災から1ヶ月ほどして別の避難所から移ってきた数家族は、体育館内にスペースを分けてもらえず、寒風の通り抜ける廊下にダンボールで仕切りをつくって寝泊りしていた。また、盛岡から炊き出しにやってきたある支援者は、持ち込んだ煮物を温めようとしたところ、避難所の台所を任されているという女性に怒鳴られていた。「この避難所では原則として煮炊き禁止だから、こういうことをされては迷惑だ」と言うのだ。この発言が彼女の恣意的な発言なのか、役場の指示なのかは不明だが、他の多くの避難所では避難者による炊き出しが日常におこなわれていたことを考えるなら、まことに奇妙な発言であった。

町方の避難所の実態については口をしぶる人が多い中で、一緒に活動をしたことのある白澤良一さんや望月紀樹さんだけは、それについて重い口を開けてくれた。白澤さんは最終的には白澤鹿子踊伝承館に落ち着くが、最初に避難した城山の体育館やそのつぎに避難した大ヶ口の避難所で目撃したものを、つぎのように言っている。「(ここでは)自分さえよければっていうのが目立ちましたね。自分さえ生き延びればっていう。そういう光景を、もう何度も見たですね。パニック状態の中で、自分の身は自分で守るっていうのは大事です。けれども、やっぱりこうそれを越えた、争いじゃあないですけども、その寸前の状況が見られましたよね。そういうこともあり、お互いの支えあいていうのが重要なことだとつくづく考えたんですよ」。

5.2 食料もなく、毛布もない

一方、城山の体育館にとどまった望月紀樹さんは、その実態についてつぎのように語っている。「すごい数だったです、最初は。最初の日は本当にね、寒くてね。避難所なのになぜか毛布もないしね。毛布もないし、みんなシートかぶって寝てましたよ。えー、なんでっていう感じですよ。1枚もないんですもん。

今何をやったらいいのか、自分でもわかんない状態でしたからね。もう、町の状況見てね、「誰に助けを呼べばいいんだ」という感じで。そのうち自衛隊さんとかきて、いろいろ消火活動とかやってくれて。でも、「もう、この先どうしたらいいんだ」という感じでしたね。

対策本部ができたのは、何日目くらいですかね。つぎの日くらいじゃないですか。でもそのときは、何か困ったことがあって対策本部に行っても、取りあってももらえるような状態じゃなかったですよ。結局、うん、自分たちのやることで精一杯だったんじゃないですか、対策本部の方も。毛布とか届いたのは、どのくらいなんのかな、3日、4日くらいかな。

避難所ってね、毛布とかあるのが普通でしょ、本当でしょ。だってね、津波ばかりじゃなくて、いろんな災害があった場合に、避難所に逃げますよね。だからね、毛布とか食料とかね、全部そろっているのが普通なんですよ。それが何もなかった。うん、結局、そういうのが役場のミスですよ。子供がかわいそうでしょ、寒くて震えててね。1階の避難所、あそこ天井高いでしょ。だから全然暖まんないんですよ。だから、あの、シートにくるまって寝てね。

食事なんか出ないですよ。5日くらい、4日か5日くらい出ませんでした。出ないで、そして最初のご飯が玄米ご飯で、このくらいの小っちゃいおにぎり。それに塩つけて、1日に1個食いました。うん、そうですね、それが最初で。それがだいたい1週間から10日くらいはつづいたのかな。炊き出しもなかったですね、最初は。正直にいいますと、私、役場は何を考えているのかなと思いましたけどね、ええ。

結局、ボランティアの人がきて炊き出しをやったり、それだけです。で、あとは自衛隊さんの方からおにぎりが、1日に1個でも2個でも。やっぱ、塩おにぎりですね。そういう状態がだいたい20日くらいですかね、うん。なんか避難所によって違うんですよ。他の避難所はちゃんと食べ物も出てったみたいだし、避難者も自分でなんかつくって食べたり。そういうところもあつたみたいですよ。ここは何もなかったです。対策本部があるにもかかわらず。そこはちょっとわかんないですね、なんでこうなるのか。それにあの、自分たちじゃないですけど、ボランティアさんたちが調理場を使わせてくれていったら、駄目だって断られたって。そういうのがありましたね。ちょっと訳わかんないですね、何考えているのか。うん、いろんなことがありますよね、言いたいことは」(2011年6月21日)。

城山の中央体育館は避難所に指定されていたのに、食料や毛布の備蓄がなく、避難者たちは何日も飢えや寒さと戦わなくてはならなかったこと。対策本部があつたにも

かわからず、まったく機能していなかったこと。炊き出しもおこなわれていないばかりか、外部のボランティアがそれを申し出たときには拒絶されていたこと。これが町方の避難所の実情であったとすれば、そこに避難した人びとのあいだに疑心暗鬼がつのり、秩序も安寧も生み出されなかったというのは当然であっただろう。しかもこれらの避難所では、そうした状態が何週間、何ヶ月もつづいたのだった。

6 地域コミュニティと避難所の運営

6.1 地域コミュニティが避難所のあり方に影響する

大槌町というひとつの町に、海辺の集落、山側の集落、町方というタイプの異なる3つの地区が存在し、それに応じて避難所の運営の仕方も大きく異なっていたことは以上から明らかだ。これらのケースを比較することで、私たちは避難所の運営について何を学ぶことができるのか。もう一度、3つの地区の避難所のあり方を整理しておこう。

地震直後の大槌町を襲ったのは津波の圧倒的な威力と破壊であり、人びとは「津波でんでんこ」の言い伝えのままに、バラバラに逃げることを余儀なくされた。彼らとはとにかく安全な高台をめざして逃げたのだが、その後にとった行動は3つの地域によって大きく異なっていった。吉里吉里や赤浜、安渡のようにもともと地域コミュニティが堅固に存在し、住民のあいだの結束の強い海辺の集落では、津波が引いた直後から住民が生存者の搜索を開始したので、がれきに挟まれたり逃げ遅れたりした人びとを何人も救出することができた。しかも、その夜か翌朝には、町内会や自主防災組織を中心に対策本部を立ち上げることで、外部の支援を待つことなく、避難者たちが主体的にけが人の搬出や弱者保護、がれきの撤去、炊き出しなどの共同行動を開始したのだった。

一方、もともと地域コミュニティのつながりが強固ではなかった町方では、避難した地域によってその後の行動が異なっていった。白澤の鹿子踊保存会伝承館や大槌高校の避難所のようにあらかじめしっかりした組織が存在していたところでは、対策本部が素早く立ちあがり、避難者を包み込むかたちで役割分担ができたので、避難者たちも安心して過ごすことができた。それに対し、そうした組織の存在しなかった避難所では、バラバラに逃げてきた避難民のあいだで相互理解が進まなかったため、彼らは緊張を強いられる状況におかれていた。そのなかでは、山側の集落の避難所に逃げ

た人びとは、地元住民にあたたかく迎え入れられたことでたがいの理解と役割分担を進めていき、避難所での生活を耐えうるものにしていった。しかし、他の町方の避難所ではそれを実現することはできず、避難者たちは外部の救援を待つだけの受け身の存在でありつづけたのだ。

地震と津波がすべての施設と制度を流し去って、役場も警察も機能していなかった3週間のあいだ、崩壊したまちに一定の秩序をつくり出し、避難者たちの生活を支え安心を生み出していたのは、被災前から存在していた地域のコミュニティや組織のつながりだけであった。彼らはそれに依拠することで、一定の秩序と生活の保証を実現していたのだ。やがて、4月1日に役場の機能が復旧し、自衛隊や他の市町村、NPO組織等の支援も入ってきたが、大槌町のいくつかの避難所がつくりあげた相互扶助のメカニズムは、「ボランティアお断り」の貼り紙を出すほど強固なものになっていた。というよりむしろ、避難所からいくつものNPO団体や社団法人が誕生し、大槌町の将来をリードする活動を展開するにいたっているなど、避難所で形成された組織と共同行動のあり方は主体性と自主性を備えたものになっていたのだ。

6.2 東日本大震災と阪神淡路大震災

被災後に大槌町の人びとがとった行動を1995年の阪神淡路大震災のケースと比較することで、大槌町における緊急避難期の特徴を明らかにすることができるだろう。一般に人命救助において最重要なのは「災害発生から72時間以内」とされるが、阪神淡路大震災のときも被災直後の人命救助に当たったのは警察や自衛隊ではなく、近隣の人びとや地元住民の消防団であった。この地震では全壊建物が11万1,503棟、死者行方不明者5,502人と、死者行方不明者数や建物の損壊数で東日本大震災の約3分の1の被害を出したが、被災直後に開始された地元消防団らの救助活動によって958名の人命が救出されている¹⁸⁾(後藤2008:50)。今回の東日本大震災では、死者行方不明者のほとんどが津波によるものであり、しかも津波がくり返し襲ったために住民自身による救助活動の開始が遅れた。しかし、いくつかの地域で積極的にそれがおこなわれていたことは、吉里吉里や赤浜などのケースからも明らかだ。

一方、東日本大震災と阪神淡路大震災を比較すると、一番の違いは復旧過程における町内会の位置づけにある。大槌町のいくつかの集落では町内会が中心になって対策本部を立ち上げ、それが住民の安全と生活の保障にあたっていたのに対し、阪神淡路大震災後の神戸市では町内会の活動が弱かったことが確認されている。たとえば神戸市のアンケート調査によれば、避難所の運営にあたった自治会・町内会は全体の15.5

パーセントに過ぎず、その運営の多くは行政機関の手にゆだねられていた（松井 2008: 60）。また、住民を対象とした質問においても、町内会が救急と災害復旧の過程で役立ったかという問いに対し、「十分機能した」の回答は 31.4 パーセントにとどまり、「十分機能しなかった」がその倍の 61.5 パーセントに達している（総合都市問題研究機構 1994: 54）。被災前からまちづくり活動がさかんで、町内会が十分に機能していた一部地域をのぞいて¹⁹⁾、地域コミュニティの核となるべき町内会の役割が神戸市では限定的なものにとどまっていたのだ。

被災直後の救助活動においては大槌町も神戸市も大差ないのに対し、その後の避難所の運営において町内会の位置づけが大きく異なっていたのはなぜか。被災直後に生じる相互扶助と連帯の精神について、しばしば言及されるのが「災害ユートピア」の観念だ。1906 年のサンフランシスコ大地震から 2001 年のニューヨーク世界貿易センタービルの爆破にいたるまで、歴史上の大惨事の後の人びとの行動を比較したアメリカのジャーナリストであるレベッカ・ソルニットは、地震や津波、水害、大事故などの大災害が生じたときに、しばしばいわれるように略奪と破壊が生じるのではなく、むしろ多くの人びとは行政の介入を待つことなく自発的に助けあいの行動を起こすと主張する。彼女によれば、そこでは善意と連帯の空間が広く成立するのであり、それを彼女は「災害ユートピア」と呼んでいる（ソルニット 2010）。

たしかに今回の震災後でも、あるいは神戸市のケースでも、被災直後にそうした「災害ユートピア」が出現し、逃げ遅れた人びとの救助や社会的弱者の保護に当たっていたのは疑いない。しかし、そのように自発的に生じた「災害ユートピア」が、いつまでつづくことができ、それが生じる場所と生じない場所の違いは何に由来するのか、という肝心な点をその観念は説明することができていない。たとえば、おなじ大槌町でも、海側の集落では「災害ユートピア」といってもよい人びとの献身的な行動が被災後 5 ヶ月ものあいだつづいたのに対し、町方の避難所ではそれが生じるどころか、逆に利己的で我勝ちの行動が支配的であったことは先に見たとおりだ²⁰⁾。とすれば、そうした違いがなぜ生じたのかを説明できなくてはならないはずなのだが、学問的というよりジャーナリスティックに構成されたこの観念では、それができていない²¹⁾。これでは説明概念としてははなはだ不十分なのだ。

7 考察

7.1 地域コミュニティと防災

それでは、被災後の人びとの行動の違いは何に由来すると考えられるのか。答えはすでに明らかだろう。善意と連帯のユートピア状態が生じたのは、大槌町海辺の集落のように、被災前から地域コミュニティが十分に機能し、住民のあいだの横のつながりが存在していたところであった。それに対し、町方ではもともと地域的なつながりが強くはなかった上に、ひとつの避難所にさまざまな町内会から避難者が集まっていたために、そうしたつながりは希薄であった。連帯と相互理解に欠ける彼らは、自主的に対策本部を立ちあげることもなければ、炊き出しなどの共同作業を主体的におこなうこともなく、援助を待つだけの受け身的な存在に甘んじていたのだ。

私たちが今回の東日本大震災後の人びとの行動から学ぶものがあるとするれば、いざというときに地域コミュニティがどれだけ大きな役割を果たしうるかを再認識させられたことだ、と言ってよいかもしれない。吉里吉里や臼澤の人びとの自主的で連携に満ちた行動は、都市に住む人間からすれば羨望としかいいようのないほどであり、そこに私たちは理想的な地域コミュニティのあり方を認めることができる。しかも、連帯感の強い避難所では、震災関連死者が少ないことが確認されているだけでなく²²⁾、遺体の運搬や確認にあたるなどの過酷な作業に従事していた人びとにも PTSD の症状が出ていないことは、吉里吉里のケースで見たとおりだ。堅固な地域コミュニティのなかに自分の位置を見出すことで、人びとの苦悩や苦痛に満ちた経験は地域コミュニティへと回収され、人びとは個としてそれに向き合うことから解放されていたのだ。

とはいっても、今後の日本社会の災害に対する備えの強化、つまり防災力の向上は、ソフトの部分では地域コミュニティの結束と活動の再建にかかる部分が大大ともし結論づけるとすれば、それはないものねだりの議論としかいいようがない。地域コミュニティが比較的堅固に存在する大槌町のような地方の市町村に対し、日本の他の多くの地域ではコミュニティが多くの機能をすでに喪失してしまっていることは、神戸市の事例を見るまでもなく明らかだ。とすれば、地域コミュニティの再建という雲をつかむような議論ではない議論を、どこまで組み立てることができるか。それが、ここで問われていることであろう。

この点に関して私が注目したいのは、臼澤の伝承館や大槌高校のケースだ。これら

の避難所へ逃げ込んだのは町方のバラバラな諸個人であったが、そこでは彼らを地域団体や高校などの組織が抱え込むことによって、一定の秩序をつくり出し、彼らのあいだに相互理解と安心とを生み出すことができた。このケースの教訓はつぎのことにあるように思われる。役割分担と権威の相互承認をもつ組織があらかじめ存在し、しかもそれがいざというときに諸個人を包摂するだけの能力を持ちうるなら、非常事態にバラバラに集まった諸個人のあいだにも一定の秩序と相互理解をつくり出すことが可能になるということだ。

とはいえ、大槌高校や白澤の伝承館のようなケースは例外的だという反論があるかもしれない。たしかに、これほどの組織力のある避難所は稀だろうし、ひとつの組織の権威を地域社会の多くの成員が共通して承認するというのは現実にはあまり起こらないことであろう。しかし、もし地域に複数の組織があり、それらが共同で活動するとなれば、多くの人間のあいだにその権威を受け入れようとする傾向が生じるということはありえないことではない。権威もしくはカリスマとは、過去にウェーバーがするどく指摘していたように、圧倒的な影響力を持つひとりの人間がいて、皆がその力にひれ伏すということではない²³⁾。むしろ、ある人やある組織の権威を承認する人びとが一定程度集まることで、その権威は他の人へと感染していき、結果として大勢の人間が共通して承認するようになっていくのだ²⁴⁾。

それでは、地域の防災力を高めるためには、地域のもついかなる資源や能力を活用すべきなのか。地域の中にはすでにたくさんの組織が存在していることは明らかだ。町内会や消防団、自主防災組織といった半官半民の組織はもちろん、老人会、婦人会、PTA、福祉協議会、スポーツ団体、郷土芸能団体、各種サークル、まちづくり協議会、商店街など、多数の組織が存在しない地域などどこにもない。しかし、今の日本社会では、それらの組織のあいだに意思疎通や連携があることはきわめて稀だ。これでは、もし非常事態が生じたとしても、それらの組織はたがいに他の存在を知らないか、あるいは不信感をもったままバラバラに行動するだろう。一方、もしそれらの組織のあいだで話し合いがおこなわれており、いざというときにどう連携するかがあらかじめ合意されていたなら、その連携は非常時に有効に機能し、地域住民の多くから支持を受けることも可能になるだろう。

万一、地震や洪水等が発生したときには、それらの組織はどこに避難し、どのように連絡をとりあい、どのように役割を分担するのか。複数の組織のメンバーが平時から集まり、行政も可能なかぎりの情報を提供して、話し合っておくことだ。ここでも重要なのは、最大限の情報を提供することであり、それを踏まえて主体的な行動のプ

プログラミングと連携方法を住民の話し合いで確立しておくことだ。

たしかにそうした連携は、吉里吉里のような地域コミュニティの堅固さに比べたなら、弱いものでしかないかもしれない。しかし、堅固な地域コミュニティの再建ないし建設は、今の日本社会の多くの地域で困難なことは明らかなのだから、建前や願望だけの議論はしない方がよい。複数の組織の連携からなるゆるやかなコミュニティ²⁵⁾の建設こそが、いつなるとき大地震が再来しないとも限らない日本の現状では、防災力の向上のために何より重要なことではないだろうか。

7.2 ボランティアと NPO の位置づけ

避難所の運営の仕方に地域コミュニティの性格が大きくかかわっていることは見てきたが、被災直後に避難所で少なからず見られたのがボランティアおよび NPO 関係者であった。避難所とは、避難者自身の精一杯の努力にもかかわらず、その定義からして自立不可能な組織であるのだから、他者とどのような関係を維持するかという問題をいやおうなく抱えている。その意味で、避難所と被災した地域コミュニティにとって、ボランティアや NPO 団体との望ましい関係とはどのようなものかという点も、今回の被災各地で焦点化された課題であったし、今後もそのようなものでありつづけるだろう。

実際、今回の震災後も避難所とボランティアや NPO とのあいだではさまざまな問題が生じていた。吉里吉里の避難所では「ボランティアお断り」の貼り紙が出ていたこと、安渡小学校の避難所では被災から3ヶ月もたたないうちに、ボランティアによる炊き出しに対する避難者の不満が出ていたことは、先に見たとおりだ。ここから、大槌町の人びとの一部はボランティアや NPO の活動を不要だと見ていたと結論するとすれば、あまりに早計過ぎる。これらの不満や拒絶はいずれも住民の結束が高い避難所で生じていたものであり、被災直後に行政がまったく機能していなかった大槌町では、全体として見た場合、NPO やボランティアの支援なしで緊急避難期を乗り越えることができたと考えることは不可能なのだ。

ボランティアや NPO の窓口となるのは、市町村の下にある社会福祉協議会（社協）が立ち上げるボランティアセンターであり、そうしたメカニズムは「ボランティア元年」といわれた阪神淡路大震災後にすでに確立されていた。一方、大槌町の社協では、会長と事務局長、総務課長などの役職者が全員津波によって亡くなってしまったので、被災直後は何から活動をおこなえばよいのか五里霧中の状態であった。そのことを社協で NPO やボランティアとの窓口になった川端伸哉さんは、つぎのように

語っている。「人的な支援が始まったのは3月の20日ごろに、支援プロジェクト会議の人たちと他県の社協の職員が入ってきました。(それまでは)今後の活動を模索するっていうより、もう避難生活とおなじですね。デイサービスセンターや施設があるんですが、そこの利用者も一緒に避難したので、どちらかという、これからの運営を考えるとというより、避難生活、利用者をどう守っていったらいいかを考えながら避難生活をしてたっていうのが実情ですね。

ボランティアセンターを立ち上げたのは3月の26日くらいですね。その間、看板を掲げる、開設するっていうよりは、避難所をまわって各避難所の代表者さんと顔合わせをしてました。で、少しずつニーズを探して、準備ができれば開設しようってことで。中央公民館がこの上にあるんですけど、そこの外にテント一張りで開始しました。電話も1台でしたし、パソコンもプリンターとかももちろんなかったので、紙と鉛筆と電話1本ですべて対応したって次第です」。支援者の窓口となる社協やボランティアセンターそのものが、外部の社協やNPOなどの支援によってはじめて機能し出したのだった。

被災前に大槌町の医療の核であった県立大槌病院が津波によって2階まで破壊され、町内のすべての医院や診療所が流されてしまった医療不在の状況のなかで、いち早く支援に入ったのは岡山に本部をもつ国際救急医療NPOのAMDAであった。その活動は被災後すぐの3月16日にはじまり、病院が被災したために大槌高校の教室を診療室として活動をはじめた県立大槌病院と共に、外部の支援の医師などを取り込みながら、大槌町全体の医療を一手に引き受けていた。やがて、大槌病院の仮診療所が完成し、民間の医師も診療を開始したため、これらの医療機関に引き継ぐかたちでAMDAは4月30日にその活動から撤退した(菅波編2011)。

一方、炊き出しや物資の供給に活躍したのは、東京に本部を置く国際NPO「パレスチナ子供のキャンペーン」(CCP)であった。海外で活動する災害支援NPOの35団体は半官半民のジャパン・プラットフォーム(JPF)に加盟しており、今回の被災の甚大さを受けてJPFはただちに68億円の資金を集め、それを集中的に投下することで、東北3県で活動する80ほどの団体に資金援助をおこなった。その資金に支えられて大槌町に入ったCCPは、炊き出しや緊急支援物資の供給をはじめ、子供の支援、避難所運営、津波によって流出した写真や書類の整理など、さまざまな活動を展開した。AMDAにせよCCPにせよ、海外で長い活動実績と人的資源をもつ災害支援組織であり、それだからこそすべての機能が失われていた大槌町でも被災者を支える活動が可能だった²⁶⁾。

これらの団体は被災後すぐに大槌町での活動を開始していたが、やがてボランティアセンターが窓口として機能するようになり、大槌町までの交通手段も確立されるにつれて、多くのボランティアやNPO団体が活動するようになっていった。ところで、今回の震災後のボランティアのあり方や活動内容については多くのことが言われている。とくに被災直後に、現地の混乱と受け入れ態勢の不備を理由に、現地でボランティア活動することは自粛すべきだとする発言があいついだこと、人口の多い大都市から遠く離れているために被災地まで行くのが困難なことなどの理由で、ボランティアの数が阪神淡路大震災と比べて4分の1程度と大幅に少ないことが指摘されてきた(村井2011)。

しかしこの数字は、各地のボランティアセンターが掌握しているボランティア数だけをカウントしたものであり、それ以外の経路をたどって被災地に入っているボランティアも多いので、必ずしも実情を反映していないという反論もある(新2011)。実際、岩手県から宮城県までの被災地のほぼ全域を訪れ、とくに岩手県の複数の市町村で活動してきた私の目からしても、ボランティアがそれほど不足していたという印象はない。

むしろ問題は、ボランティアやNPOが石巻市中心部²⁷⁾や釜石市中心部など、一部の入りやすい地域に集中する一方で、おなじ石巻市でも旧雄勝町や釜石市の鶴住居地区などの周辺部では、ボランティアの活動がまったく見られなかったことだ。その結果、被災から1年半を経過した時点でも、これらの地域では被災直後とあまり変わらない荒涼とした風景が広がり、住民の帰還の意思を阻害している。ボランティアというかぎられた資源の偏在をどのように再分配し修正していくかは今後の課題であり、「石巻の奇跡」などと無条件に称揚するところから現状ははるかに遠いこと、ボランティアやNPOをどうマネジメントするかはさらに詰めていくべき点が多いことを、私たちは認識すべきだろう。

一方、炊き出しに対して大槌町の避難者から不満が出ていたという事態には、ボランティアやNPOと住民のあいだの望ましい関係性という別の次元の問題が見えてくる。避難者自身による炊き出しが機能していた避難所では、炊き出しや傾聴ボランティアなどのニーズは少なかったが、それが機能していなかった町方の避難所では、支援者の手になる炊き出しは避難者の多くから歓迎されていた。また支援者の方でも、避難者とじかに向き合い、直接に感謝を受けとることのできる炊き出しを実施したがる傾向があった。しかし、それが長期にわたってくり返されるとなると、いくつかの課題が生じていたのも事実だ。

ボランティアや支援者の行為は善意にもとづくものであり、その意思は尊いものであって、誰もそれを否定することはできない。ボランティアが無条件に歓迎され、評価される理由はそこにある。反面、善意に満ちた彼らの行為は、感謝以外の見返りを求めないものであるだけに、そこには与える者と与えられる者という不平等な関係性がたえず再生産される危険がある。支援者の側にそうした優越意識がなかったとしても、その関係性は事実としてつくり出されてしまうために、避難者の方ではそれを負い目として胸の内に沈めていくのだ。このような不平等な関係性が固定されてしまうことは決して望ましいものではないのは明らかであり、それを感じていたからこそ安渡小学校の避難所で赤崎さんは、支援者と避難者が共に働いて共に食事をするバーベキューのような形式が好ましいと明言していたのだ。

さらに、ボランティアやNPOの活動には別の問題がある。避難者が支援を受ける限り、彼らは受け身の存在にされつづけるということだ。「支援慣れしてはいけない」と被災者たちはよく口にするが、問題は慣れというより、支援されているかぎり彼らは（あるいは彼らの一部は）自分の意思で活動する主体的な行為者にはならないということだ。その点に、避難者自身が主体的に対策本部を立ち上げて、他に頼ることなく活動を継続した吉里吉里や臼澤地区の避難所の真価があるのだ。そしてそれらの避難所では、そのようなかたちで集合的で能動的な活動主体を形成できたからこそ、地域の中で活動することを目的とするNPO法人「吉里吉里国」や「遠野まごころネット」と連携する「まごころの里」、さらに社団法人「おらが大槌夢広場」などの団体がそこから誕生することができたのだ。

被災から1年半たった今日もなお、被災地に入って活動をつづけるボランティアやNPO団体が存在するが、私は原則的にボランティアはもういらないと考えている。多くの生産手段を喪失した被災者たちが主体的に現金収入を得られるような道筋をつけるのに協力することや、こころのケアやまちづくり、産業振興などの領域で、専門的知識をもつプロのボランティアへのニーズは今後も減ることはないだろう。しかし、それらの分野を別としたら、肉体労働の提供などの支援はもはや不要なのではないか。むしろ、現在ボランティアがやっている仕事を地元の人に委託していくことが必要なのであり、そうしなければ、被災者は支援者に依存し、支援者は被災者から与えられる感謝を必要とするという「共依存」の関係が再生産されるだけではないか。

ボランティアやNPOの根本的な問題は、自分たちの活動がはたして必要か否かの検証がほぼ不可能になっている点にあることを最後に指摘しておこう。本来、すべての人間の活動は、外部の批判や検証にさらされながら実施されることが原則である。

たとえば企業であれば、その活動が消費者にとって必要か否かは売り上げの向上ないし減少というかたちで検証されるし、農業や漁業においても、活動内容が不適切であれば不作や不漁というかたちで結果はすぐにはね返ってくる。行政がしばしばアンケート調査に訴えるのも、多くの人によるチェック機能が重要であることを意識しているためだろう。

ところが、ボランティアの場合には、自分たちの活動がもし不要であるとすれば、自分の存在を否定することになってしまうのだから、そうした反省や批判がみずから生じる余地はない。それに加えて、ボランティアという活動が個人の意思に任されているがゆえに集団的・規範的なチェックが入りにくくなっていること、しかも「善意のヴェール」とでもいうべきものがかぶせられているために批判がおこなわれにくくなっていることが、それを外部から検証することを妨げている理由だ。

一方、NPOの場合には外部の識者などに自己の活動の検証を依頼しているが、そこでの問題は、本来自分たちの活動が必要とされているかどうかは、その対象者（このケースでは被災者）によって検証されるべきなのに、そうではないことだ。NPOが検証者として意識しているのは、資金を提供してくれるサポーターや同業者、外部の識者（彼らは短期間だけ現地をおとずれて検証する）などであり、活動対象者＝被災者ではない。そうであれば、病院のサービスや技能を検証するのに、患者ではなく、医師や識者にゆだねるのとおなじことだ。それではNPOが「象牙の塔」と化してしまうことは避けられないだろう。

くり返すが、私はボランティアやNPOが不要だといっているのではない。とりわけ被災直後の制度も物資も何もない状態で、被災者たちの生命を支え、心の安定に寄与したのは彼らボランティアの存在であり、彼らの活動であった。しかしながら、緊急避難時の支援と復旧復興時の支援とでは、存在理由も活動形態も異なってくるはずだ。そのことを踏まえつつ、みずからの活動を活動対象者によってたえず検証していくという姿勢をもし欠いたなら、外部の支援者の活動は不要になってしまうだけでなく、現地の人びとが主体的な行為者として自己形成することを阻害する危険があることを銘記すべきだろう。

神戸市の被災地 NGO 協働センター代表の村井雅清は、ボランティアには「最後の1人まで救おう」とする覚悟が必要だと主張する（村井 2011: 90）。村井らが「遠野まごころネット」の立ち上げにかかわり、被災者を支援したいとの熱意はあったが、どう活動したらよいかさえわからなかった岩手県下の人びとに指針と教訓を与えたのは事実だ。しかし、そのことを勘案するとしても、このことばには疑問を感じざるを



写真 12 赤浜の民宿の上に乗りに上げたはまゆり号

得ない。「最後の1人」を判断するのは誰であり、「救おう」ということばに善意の衣をまとった傲岸はないのか。被災の先進地である神戸市から入った支援団体のほとんどは、最終的には岩手県下から締め出されていったが、そこには他者と徹底してつきあっていくことの困難が底流にあったように思われるのだ。

8 結論

本論は、2011年3月11日に発生した東日本大震災によって壊滅的な被害をもたらされた大槌町で、住民の半数以上が逃げこんだ避難所の誕生から、それが8月11日に閉鎖されるまでの5ヶ月間の、避難所における人びとの行動と語りをできるだけ忠実に再現しながら、そこからあるていど一般化可能な理解を得ることを目的として書かれたものだ。文中でも言及したように、避難所の運営の実際やそこでの人びとの行動のあり方をまとめて記述したものは意外と少なく、しかも10ヶ所以上の避難所をおとずれながら、ほぼリアルタイムで聞き取りと観察を実施した研究は皆無とあってよい。その意味で本論は、被災直後の地域社会における人びとの行動と結合の原理、さらにそこからの集団的で能動的な主体性の確立過程を明らかにしたものと

て意義をもつといえよう。とりわけ避難所における組織化の実態と主体性の成立過程を克明にあとづけた点で、避難民研究が人類学的研究のひとつの主題として浮上している今日、比較のためのひとつの基盤を提供していると位置づけることができる。

本論から何が明らかになったのか。本論では大槌町の10ヶ所あまりの避難所で得たデータを比較することから、避難所の運営の仕方や避難者どうしの相互理解の進展の度合いには、その背景となる地域コミュニティの結合力の強弱が大きく関係していることが理解された。そして、そうした地域コミュニティの結束力に欠けるところでは、常日頃から地域内にある諸団体の連携をとっておくことが、非常時の緊急避難行動や避難所の運営に有効であるだろうことが提言された。また、大槌町に数多く入っているNPOやボランティアの活動は、被災直後の混乱期にはきわめて重要かつ有効であったが、もしそれらがみずからの活動とその活動内容に関する自己検証と他者による検証をたえず実施していかないなら、現地の人びとが能動的で集合的な行為主体となることを阻害する危険性があることもまた明らかになったのだ。

ところで大槌町の中では、吉里吉里や安渡、赤浜、白澤など、住民のあいだのむすびつきの強い集落に設置された避難所では、被災後すぐに住民主導で対策本部が立ち上げられ、生存者の救出、がれきの撤去、ヘリポートの設営、遺体の搜索と身元確認、炊き出し、風呂の運営などの共同作業が実現されていた。これらは住民自身が主体的かつ集合的に自分たちの活動を組織していったという点できわめて意義深いものであった。それに加えて注目されるのは、「NPO法人吉里吉里国」や「NPO法人遠野まごころネット」と連携した「まごころの里」がこれらの避難所での活動から立ち上がるなど、地元の地域社会を新しく再編成しようとする組織の芽がそこから育ってきたことだ。

これらの団体は、避難所で実現されていた主体的かつ集合的な活動を継続するべく組織化されたものであり、その意味ではそれらの団体は、避難所で作くり出された共同行為を永続化するための発展形態と見ることができる。一方、おなじように強い団結力をもっていた赤浜の避難所からは、研究者の支援を受けながら住民主導による赤浜地区まちづくり運動が生じており、そこにも行政の関与が大きい他の地区のまちづくりとは異なる独自の将来構想・地域設計が示されている。これらの例に見られるように、津波がすべての制度を崩壊させた大槌町では、避難所で住民が自発的にかたちづくった共同行為の形式は、地域社会への貢献をめざす新たな団体の形成へと結実し、大槌町の未来と新たな可能性を示す萌芽となりえているのだ。

「最終的な目標はですね、この吉里吉里の海、三陸の海、もっともっと豊かな海を

育てること。津波でやられましたから、海も復活復興させて、守って行きたいというのが最終目標です。ですから、三陸の豊かな海があって、山があって、吉里吉里のまちがあって、そしてそこで暮らす俺たちがいるということ。一番大事なことは海です。つぎは山です。町です。最後は私たち、と思っています。俺たちの豊かな生活を最終目標としているわけではないんです。その逆です。豊かな海がないと、吉里吉里の町は豊かな町になりません。豊かな山がないと、海も豊かにならない。そこさえ誤らなければ、これからの私たちの活動は道を誤ることはないと思います」。

吉里吉里の避難所でおこなわれていたがれきの撤去作業からはじまり、風呂を設置するための「復活の薪」プロジェクトへと継続され、さらに「NPO 法人吉里吉里国」へと発展させてきた芳賀正彦さんのことばだ。環境重視の世界観・社会観といってしまえばそれまでだが、そうした見方が抽象的に語られるのではなく、海と山と里をあわせもつ吉里吉里というひとつの地域のなかで語られるがゆえに強い説得力を持っている。彼らは、森林の成長を阻害する間伐材を伐採することで得たお金を活動資金としながら、その間伐材で学校を作り、そこで環境意識を育成することで、吉里吉里の将来を変えていきたいと口にする。普段であれば語られることさえないであろうそうした「夢」が、被災地では外部の資金が入りやすいこともあり、大きな強い説得力をもって語られているのだ。

「私は3月11日を境に自分の価値観が変わってしまっただけ。それまではモノに固執してたんですけど。そうじゃなくて、すべて失ってしまったときにですね、財産も何もすべて形のあるものを失ってしまったときに、やっぱり何が必要かっていうと、やっぱり人とのつながり、そっちの方がなによりも代えがたいっていう。人を思いやる気持ちとか、絆とかが、一番生きていくには必要なのかなと思って。5月2日からずっとこられている（ボランティアの）方が、ここで活動して、他の人に涙を流すのを、そういう場面を見ていると、こういう人たちに囲まれて自分も活動できるっていうのが一番幸せなことかなと。今、そういう風に思っているんですよ。実にこう幸せですね」。

被災の事実があったからこそ今があり、ものから人のつながりへの価値の転換ができたからこそ、今が自分のもっとも幸せなときだという「まごころの里」の臼澤良一さんのことばだ。そのことばには、津波の悲惨を乗り越えていただけに大きな説得力があり、すべてのものを包み込むだけの肯定の感覚がある。その視点から彼は、地元の被災者に現金収入の場を提供するために「まごころ広場」や「まごころの里」をつくり、三陸沿岸の被災者の交流と津波で破壊された郷土芸能を振興するために毎年夏

に「三陸海の盆」を開催し、それらを拠点にさらに活動を拡大しようとしている。

自己肯定と地域に根差した将来の「夢」。彼らがこれだけ誇りをもち、明日を強く信じて「希望」や「夢」を口にすることができるのは、彼らが津波の全面的破壊を生き延び、それを克服してきたという認識をもつためだろうか。それともそれは、彼らが地域と共に生き、地域の人びとと共に生きているがゆえの信頼と確信を心のなかに育てているためなのだろうか。今、結論を出そうとすることは早計だ。答えを出すためには、今後の彼らの活動を見守っていかなくてはならない（2011年9月7日提出）。

注

- 1) 三陸沿岸にはこの30年のあいだに、「宮城県沖地震」と名づけられた地震が99パーセントの確立で発生することが予想されており、避難訓練がくり返されるなどの警戒がとられていた。しかし、その規模はマグニチュード7.5程度と予想され、大槌町の津波の高さも6メートル以下と推測されていた。そのため、津波は大槌町の防潮堤ではほぼ防止できるものと考えられ、そのことが避難行動の遅れや自宅待機をもたらしただけでなく、到達するとは予想されていなかった指定避難所のいくつかを全壊させ、被害を拡大させた。大槌町で避難所として指定されていないながら破壊された避難所は、多くの死者を出した大槌小学校や江岸寺をはじめ、数ヶ所あった。
それに加えて、地震直後に地震計が振り切れてしまい、地震規模を計測することが不可能であったために、気象庁が地震直後に発表した津波の予想高は、岩手県と福島県で3メートル、宮城県で6メートルというものであった。この数値は地震の20分後に、釜石市の沖合に設置されていたGPS津波波高計がそれ以上の高さを記録したことから修正されたが、そのときには停電のために防災放送も機能しておらず、最初の3メートルという発表だけを記憶している被災者が多い。
今回の津波は未曾有の規模であったとされ、実際、明治と昭和の津波で高台移転した土地まで浸水がおよんで多数の死者を出している。その一方で、想定されていた地震の予測値があまりに低く計算され、それをもとに作成されたハザードマップが間違っていたこと、気象庁の津波高の発表があまりに低すぎたことなど、人災としての側面も多い。これらの点に関しては、竹沢尚一郎（2013）第1章の避難行動を扱った章でくわしく論じている。
- 2) 「大槌町東日本大震災津波復興計画」（2012年11月30日現在）。行方不明者の数字は届け出のあったものだけなので、実数はさらに多い可能性が高い。実際、被災から半年間は、大槌町の死者・行方不明者の総数は1,600人超、人口の10パーセント以上と発表されていた。
- 3) ビデオは45人から、40時間以上収録している。それについては、将来大槌町に津波関係の資料館ないし博物館が建設されたときのみ、そこで公開することを条件に撮影をおこなった。ビデオでは避難所内部の風景（これはプライバシーにかかわってくるので、私は撮影すべきではないと考えている）や、被撮影者の人間関係、個人情報などが含まれてしまうので、その公開に関しては制約が課されると判断するためだ。一方、それを文字に起こす作業はほぼ完了しているが、400字詰原稿用紙に換算して約1,200枚、他に録音をおこなったり、直接手帳に書いた記録が500枚程度存在している。ビデオ撮影の分も含めたこれらの記録に関しては、本や論文のかたちで発表することの承諾をとっている。なおビデオ撮影およびインタビューの日付けについては、最初に記載するときのみ本文中に記してある。
- 4) 災害エスノグラフィについては、林 春男・田中 聡・重川希志依他（2009）を参照。これらによれば、災害エスノグラフィはつぎの目的をもつと定義される。①災害現場に居合わせた人びと自身の言葉で教えてもらう。②災害現場に居合わせた人びとの視点から災害像を描く。③災害現場の人びとの体験を体系化し、災害という異文化を明らかにする。④災害という異文化を、その場に居合わせなかった人びとが共有できる形に翻訳する。⑤災害現場にある暗黙知を明らかにする。⑥傍観者の視点を捨てる。無意識のうちに持つ災害に関するステレオタイプを捨て、追体験する。

こうした定義は防災科学の観点からは有意義なものであるかもしれないが、人類学の観点からいえば多くの問題を含んでいる。あまりにエスノグラフィをステレオタイプでとらえているだけでなく、いくつかの概念を間違っ理解しているように思われるためだ。とりわけ被災の経験を「異文化」と呼ぶのは問題外だし、翻訳、暗黙知、体系、災害像などの概念も正確性を欠いている。これに対し、私はエスノグラフィを、対象社会の人びとの主観と記述者としての私の主観という、ふたつの主観のぶつかる場としてとらえ、そこに立ち上がる客観を描き出す作業と考えている。そうすることで初めて、対象となる人びとへの理解と共感と、万一私たちが同じような経験にさらされたときにどう行動するかといった教訓を得ることが可能になると考えるためだ。

- 5) 私の岩手県での滞在は（一部宮城県での活動も含む）、2011年4月8日～24日、5月29日～6月28日、7月31日～8月18日、9月22日～10月16日、10月29日～11月18日、2012年2月24日～3月18日、4月8日～28日、5月9日～18日、5月27日～6月13日、7月12日～31日、8月6日～26日、9月7日～21日の計242日だ。このうち最初の3回については研究費を見つめることができなかったので、自費研修のかたちで行き、その後、三井物産環境基金の研究助成を得ることができたので、調査研究のための出張のかたちで現地滞在した。
- 6) 大槌町をはじめとする岩手県の漁村集落の多くは、近年では定置網と養殖漁を主としている。養殖といっても岩手県のそれは、川がもたらすミネラルを養分としておこなわれるワカメやカキ、ホタテの養殖であり、宮城県のように餌を与える大規模なものではない。宮城県では漁業は大規模化しており、そこから漁業への企業の資金とノウハウを導入しようという宮城県知事の主張がもたらされていた。一方、岩手県の漁業はより小規模であり、資金の投下が少なく済むため、今回のような被災に対しても一定のフレキシビリティをもっている。
- 7) 今回の震災後の対応では、仮設住宅の建設がもっとも早く完了したのは岩手県であり、最大で5万4,429人収容していた399ヶ所の避難所が、8月31日までにすべて閉鎖された（『毎日新聞』2011年8月31日）。より大きな被害を出した宮城県では、最大で1,183ヶ所の避難所、福島県では410ヶ所の避難所がもうけられており、8月31日の時点で宮城県では133ヶ所、福島県では10ヶ所の避難所がまだ残っていた（『朝日新聞』2011年9月1日）。3県で最後の避難所が閉鎖されたのは、福島県の12月28日であった（『朝日新聞』2011年12月29日）。
- 8) 頓所直人と名越啓介『笑う避難所』など。一方、岩崎信彦他編『阪神淡路大震災の社会学第2巻』は、避難所の運営の仕方や行政との関係、そこでの生活の実態などを論じた、ほぼ唯一といってもよい研究書である。ただ各論文が短いので、実態が十分に記述・展開されていないのが残念だ。
- 9) これらの報道はそれぞれ以下でなされている。『読売新聞』2011年4月30日、『毎日新聞』2011年4月25日、『産経新聞』2011年5月11日、『読売新聞』2011年7月10日、『朝日新聞』2011年5月17日、『毎日新聞』2011年7月1日。
- 10) この図は吉里吉里の津波浸水予測図、いわゆるハザードマップだ。これを見ると、図の中央左寄りのところに神社の記号があるが、そこから左下になる道路が延びており、その上側が上住宅、下側が下住宅といって、明治・昭和の津波の後に高台移転した土地だ。三陸の津波の悲惨を描いた山口弥一郎の『津波と村』には、この高台移転を賞賛して「吉里吉里の理想郷」とまで書いている（山口2011: 101）。しかし今回の津波は、この高台移転地まで押し寄せ、下住宅の家々をすべて押し流し、上住宅の1階天井まで達した。ここに住んでいた人びとは津波がくるとは思っていなかったので逃げることをせず、大勢が亡くなったのだった。ハザードマップでは吉里吉里の浸水予測値を最大で6メートルとしていたが、実際には集落内で16.23メートル、集落外で21.41メートルに達していた（原口・岩松2011上巻: 33-34）。
- 11) 他の地域では、重病人や重症者を搬出するのにヘリコプターはホバリングを余儀なくされた。吉里吉里のとなりの赤浜集落や、大槌の町方にあり、2階まで水につかった大槌病院がそうだった。
- 12) 彼は3ヶ月のあいだ収容された遺体をすべて確認しただけでなく、どの人がどこで亡くなったかをすべて記録していった。それは、ある集落の人びとがどのように津波を経験したかを死者の側から伝える貴重な記録になっている。
- 13) 今回の被災後の捜索では、厳しい状況に慣れているはずの警察官もかなりの割合でPTSD

の徴候を示していることが確認されている。2011年9月の岩手県警の調査によれば、沿岸の警察官330人のうちPTSDの兆候を示しているのは52人、割合で16パーセントに達している（『岩手日報』2012年8月14日）。そのような経験を過去に持っていなかった吉里吉里の人たちが、過酷な状況におかれていたにもかかわらず、PTSDの徴候をまったく示していないというのはある意味で奇跡的なことだ。

- 14) このことはきわめて示唆的なことだ。ひとつの避難所でも有用とされるものが、別の避難所では無益になることがあることを示しているのだから。それゆえ必要なのは、現場に入って避難所ごとにその実態と要求を丹念にしらべていくことであり、机上の知識や計算を一律に押し付けることではない。一部に、避難所での生活の過酷さと紙製の間仕切りの導入を称揚する論説があるが（三宅2011）、大槌町の多くの避難所は送られてきた間仕切りを使用しなかった。これなどは、プライバシーをなにより重視する都市生活者の基準による画一的押付けの一例といえよう。
- 15) 安渡のとりの赤浜は、人口938の漁業を中心にした集落であり、そこも全家屋の66パーセントが全半壊するなど大きな被害を出している。この集落では地震の直後、3つある町内ごとに異なる避難所に避難したが、そのうちのひとつ赤浜小学校は海を見下ろす海拔10メートルの高台にあり、避難場所に指定されていたが、校舎の1階は完全に水没し、若干高くなっている体育館も床から50センチメートルまで浸水した。50センチメートルとはいえ、そこに避難していた大人が壁に叩きつけられるほどの勢いがあったという。
津波がおさまった後も、余震がつづいていたのでふたたび津波が来襲するかもしれない。そう考えた赤浜小学校の120人の避難者は、さらに高台へと登り、三共印刷の社屋に避難した。しかし社屋が狭いので全員が入ることはできず、女性と子供だけが中に入り、男たちは外で寒さに震えながら夜を過ごした。つぎの日も余震があったので、小学校の体育館に入ったのは翌々日であり、男たちは2晩、眠れない夜を過ごしたのだった。強いリーダーシップを持つ人びとのいたこの避難所では、すぐに対策本部を立ち上げ、がれきの撤去やヘリポートの設置をおこなうと共に、炊き出しも8月の退去の日までつづけたのだった。
- 16) この白澤地区をはじめ、大槌町の鹿子踊は、舞い手と太鼓の叩き手とが分離し、舞い手が鹿頭から垂らした幕を両手で持って舞うタイプのものであり、「幕踊系」と称される。一方、旧伊達藩に属する大船渡市や一関市より以南では、頭上に細長い紙飾りをつけた舞い手がみずから太鼓を叩きながら舞う、「太鼓踊系」と呼ばれる鹿踊が一般的だ。
- 17) いくつかの避難所には他の市町村から応援部隊が入って対策本部に詰めていたが、彼らもローテーションで移動していたため、避難者とのあいだにコミュニケーションの回路を確立することはできなかった。
- 18) 神戸市民を対象におこなわれたアンケート調査によれば、被災直後の消火・救出・治療・看護活動においてもっとも重要な働きをしたのは、「近隣の人たち」43.6パーセント、「家族」39.1パーセント、「友人」22.6パーセントなど、平常時からの人間関係であった。一方、「消防署」8.3パーセント、「警察署」6.0パーセント、「自治体」5.3パーセント、「自衛隊」12.0パーセントなど、それを担当するはずの機関がこの点では無力であったことがわかる（総合都市問題研究機構1994:56）。
- 19) 神戸市で町内会が被災後の緊急避難活動に大きな役割を果たしたのは、とりわけ長田区の真野地区であった。この地区では被災前から住民自身の手による公害追放やまちづくり活動が活発であり、住民のあいだでの組織化とそれへの住民自身の参加と評価が進んでいたために、町内会をはじめとする各種組織が被災直後の緊急避難活動やその後の避難所の運営に大きく貢献できたのだった（今野2001）。
- 20) この点は阪神淡路大震災でもおなじであった。地震直後の救出・救助においても、避難所の運営などにおいても、町内会や自治会の多くは「行政とともに無力をさらけ出した」。その結果、多くの避難者が押し寄せた避難所は「早い者勝ち」に近い状況になり、高齢者や障害をもつ人などのあいだでは、「避難所でのストレスにより、体調を崩して入院した」ケースも多かった（神戸大学震災研究会編1995:120,125,135）。
- 21) もっとも、レベッカ・ソルニットは「災害ユートピア」が発生するときとしないときの違いを、まったく説明していないわけではない。彼女によれば、それが発生するのは行動の決定が住民の意思にゆだねられているときであり、その場合には彼らの善良さと連帯意識とが優越する。一方、役所や警察などのエリート組織が関与すると、官僚的な管理体制が支配するようになり、民衆の善意は抑圧され、民衆はむしろ管理と秩序の敵とみなされるようになる。彼女は前者の例としてサンフランシスコ大地震、ロンドン大空襲、メキシコシティー大

地震、ニューヨーク世界貿易センタービルの破壊をあげ、後者の例としてニューオーリンズの大洪水をあげている。

しかしながら、著者は人びとの行動と発言の出席を明らかにしていないので、こうした解釈がどれだけ事実に沿ってなされているのかが明確ではなく、むしろ自分の主張に沿ってデータを操作しているのではないかという疑いを逃れることができない。そもそも、住民の意思と自発性に任せておけば「災害ユートピア」が出現し、エリート管理者があらわれるとその出現が阻害されるというのは、民衆は善だが支配者は悪だとする粗雑なアナキズムでしかない。「災害ユートピア」はいかなるときに出現し、その不在は何によるのかを、事実面に即しながら厳密に分析するるのでなければ、奇をてらった粗悪ジャーナリズムか、たんなるイデオロギーに過ぎぬと評されても仕方あるまい。

- 22) 震災関連死の統計によれば、岩手県 193 名、宮城県 636 名、福島県 761 名であり、その 76 パーセントが震災から 3 ヶ月以内に亡くなっている。その原因として多いのが、「避難所生活の疲労」「避難所への移動による肉体精神的疲労」あわせて 53 パーセントと過半数を超しており、「病院の機能停止」15 パーセントや「地震津波のストレス」8 パーセントに比較して断然多くなっている（『岩手日報』2012 年 8 月 22 日）。岩手県におけるその割合の少なさは、いまだに研究が厳密なかたちでなされていないが、地域コミュニティの強固さとの関連でないといふと説明できないと思われる。
- 23) カリスマについては、マックス・ウェーバーのつぎの定義を参照。「カリスマとは、ある人間のもっている非日常的なもの……みなされている資質を云い、彼は、この資質の故に、超自然的または超人間的な、または少なくとも他の人間には及びもつかない特殊非日常的な・力や性質をもった者として、……したがってまた『指導者』として評価される。当該の資質が、何らかの倫理的・審美的その他の見地からして、『客観的に』正当なものと評価されるであろうかということ、この場合概念的には勿論全くどうでもよいことである。それが、カリスマ的な被支配者、すなわち帰依者たちによって、そう評価されているという点のみが、重要なのである」（ウェーバー 1960: 31）。特別な権威と、その権威をもつ人＝カリスマによる支配の本質をついた指摘だ。
- 24) 町内会においても、地域の住民のあいだの横のつながりや共通の意識と共に、役割分担と権威をともなった組織としての一面があることを確認しよう。吉里吉里の避難所にもうけられた対策本部は、5 名の現役の町内会長と共に、元町内会長や元消防団長を副本部長に任じていた。その権威が地域住民の多くによって承認されるのに優れた組織であった。
- 25) 社会学者の今野裕明は、被災前の神戸市長田区の真野地区で実現されていた「ゆるやかな連合」が、阪神淡路大震災時の避難とそれからの復旧・復興に大きな力になったことを証言している（今野 2001）。
- 26) これらの団体の活動と並行して、遠野市の社会福祉協議会と NPO 関係者、ボランティアなどが協働して NPO「遠野まごころネット」を立ち上げ、大槌町から陸前高田市までの広い地域で今日まで活動を継続している。これは、全国から集まる個々バラバラのボランティアを吸収して、宿泊所まで提供しながらボランティア活動を継続して実施するという注目すべき形態をつくり出している。その成立過程や具体的な活動内容、組織形態等についてはあまりに多くのことがあるので、別に 1 冊の本が必要なほどだ。「遠野市のまごころネットには、我々が立ち上げる前から独自で活動していただいたので、町民のためにとってはとても良かったと思います」。大槌町の社会福祉協議会の責任者である川端さんの評価だ。
- 27) 石巻市ではピースボートからの派遣者や石巻専修大学を中心に、行政や自衛隊などと協力して連携組織をつくりあげ、全国から集まるボランティアを動員して、中心市街地のがれきの撤去や避難者への物資の配布などに大きな成果を上げた。それは「石巻モデル」などとして称賛されているが（中原 2011）、反面、おなじ石巻市でも旧雄勝町などの周辺部ではその活動がまったく見られず、私が話をうかがったときも、住民たちは自分たちが「見捨てられている」と語っていた。事情は釜石市の鶴住居地区でもまったくおなじであった。石巻市にせよ釜石市にせよ、ボランティアセンターとそれと連携する組織はそれぞれの市町村にひとつしか存在しないのだから、目に見えるかたちの成果を一極集中的にあげようとするのではなく、もっと全体に目を配りながら活動すべきであったというのが、私がいだいている評価だ。

引用文献

- 新 雅史
2011 「災害ボランティア活動の「成熟」とは何か」遠藤薫編『大震災後の社会学』pp. 193-235, 東京：講談社。
- 岩崎信彦他編
1999 『阪神・淡路大震災の社会学 第2巻』京都：昭和堂。
- 岩手県大槌町
2011 『大槌町東日本大震災津波復興計画 基本計画』岩手：大槌町役場。
- 後藤一蔵
2008 「防災をめぐるローカル・ノレッジ—消防団の系譜と今後の可能性」吉原直樹編『防災の社会学—防災コミュニティの社会設計に向けて』pp. 33-57, 東京：東信堂。
- 原口 強・岩松 暉
2011 『東日本大震災津波詳細地図 上・下』東京：古今書院。
- 林 春男・田中 聡・重川希志依他
2009 『防災の決め手「災害エスノグラフィ—」—阪神・淡路大震災に秘められた証言』東京：日本放送出版協会。
- 林 勲男編
2010 『自然災害と復興支援』（みんぱく実践人類学シリーズ9）東京：明石書店。
- 岩崎信彦他編
1999 『阪神淡路大震災の社会学』東京：昭和堂。
- 今野裕昭
2001 『インナーシティのコミュニティ形成—神戸市真野住民のまちづくり』東京：東信堂（現代社会学叢書）。
- 神戸大学震災研究会編
1995 『大震災100日の軌跡—地震発生、被害、避難、救援、そして復興へ』神戸：神戸新聞総合出版センター。
- 松井克浩
2008 「防災コミュニティと町内会」吉原直樹編『防災の社会学—防災コミュニティの社会設計に向けて』pp. 59-86, 東京：御茶の水書房。
- 三宅理一
2011 『限界デザイン』東京：TOTO 出版（TOTO 建築叢書）。
- 村井雅清
2011 『災害ボランティアの心構え』東京：ソフトバンククリエイティブ（ソフトバンク新書）。
- 中原一歩
2011 『奇跡の災害ボランティア「石巻モデル」』東京：朝日新聞出版（朝日新書）。
- 大槌町漁業史編纂委員会編
1983 『大槌町漁業史』岩手：大槌町漁業協同組合。
- 清水 展
2003 『噴火のこだま—ピナトウボ・アエタの被災と新生をめぐる文化・開発・NGO』福岡：九州大学出版会。
- ソルニット, レベッカ
2010 『災害ユートピア—なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか』高月園子訳, 東京：亜紀書房。
- ホフマン, スザンナ・Mとアンソニー・オリヴァー＝スミス編
2006 『災害の人類学—カタストロフィと文化』若林佳史訳, 東京：明石書店。
- 総合都市問題研究機構
1994 『大都市直下型震災時における被災地域住民行動実態調査』東京：総合研究開発機構。
- 菅波 茂編
2011 『AMDA被災地へ！—東日本大震災国際緊急医療NGOの活動記録と提言』東京：小学館スクウェア。

竹沢 津波の破壊に対抗する被災コミュニティ

竹沢尚一郎

2013 『被災後を生きる——吉里吉里・大槌・釜石奮闘記』東京：中央公論新社。

頓所直人と名越啓介

2012 『笑う、避難所——石巻・明友館 136人の記録』東京：集英社。

ウェーバー, マックス

1960 『支配の社会学』I, 世良晃志郎訳, 東京：創文社。

山口弥一郎

2011 『津波と村』石井正己・川島秀一編, 東京：三弥井書店。

新聞記事

(引用した記事の日付は本文中に記している)。なお、『岩手日報』と『河北新報』をのぞいて大阪版に依拠している。

『毎日新聞』

『朝日新聞』

『読売新聞』

『産経新聞』

『岩手日報』

『河北新報』